

**Developer for System z**  
**バージョン 8.0.3**

## **リリース情報**





**Developer for System z**  
**バージョン 8.0.3**

## **リリース情報**



**お願い**

本書をご使用になる前に、97 ページの『特記事項』に記載されている全体的な情報をお読みください。

本書は、IBM Rational Developer for System z バージョン 8.0.1 (プログラム番号 5724-T07)、および新しい版で明記されていない限り、これ以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： GI13-1509-02

Developer for System z

Version 8.0.3

Release Notes

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第2版第1刷 2011.10

© Copyright IBM Corporation 2000, 2011.

---

# IBM Rational Developer for System z バージョン 8.0.3 リリース情報

以下のリリース情報では、Rational® Developer for System z® バージョン 8.0.3 の新規フィーチャーおよび機能拡張について説明し、本リリースでの既知の制限をリストしています。

ここでは、Rational Developer for System z バージョン 8.0.3、および Rational Developer for zEnterprise™ バージョン 8.0.3 をご使用になる開発者向けの情報を記載します。

## Rational Developer for System z の既知の問題の検索

問題が発見されて解決されると、既知の問題として個々の技術情報の形式で文書化され、IBM® サポート・ポータルをサポート知識ベースに掲載されます。

製品の資料やリリース情報が完成するまで利用できなかった、リリース固有の制限、制約、および既知の問題に関する情報を見つけるには、知識ベースを検索することができます。

次のリンクから、現在有効なサポート知識ベースで、カスタマイズした照会を実行できます: Rational Developer for System z のすべての既知の問題の表示。

注: 次の RSS フィードを使用すると、IBM Rational Developer for System z 用に作成された最新のコンテンツを最新の状態に保つことができます。フィードは常に更新されます。

[Rational Developer for System z の最新の更新](#)

[Rational Developer for System z Unit Test の最新の更新](#)

[Rational Developer for System z with EGL の最新の更新](#)

[Rational Developer for System z with Java の最新の更新](#)

[Rational Developer for zEnterprise の最新の更新](#)

## ハードウェア要件

ハードウェア要件およびソフトウェア要件については、以下の資料を参照してください。

- **z/OS®** ホスト要件: Rational Developer for System z ホスト構成ガイド
- **AIX®** および **Intel Linux** の要件: Rational Developer for System z RSE サーバー インストールおよび構成: AIX および Linux
- **Linux on System z** の要件: Rational Developer for System z RSE サーバー インストール・ガイド: Linux on System z
- **クライアント要件**: Rational Developer for System z インストール・ガイド

## インストールおよび構成

Rational Developer for System z のインストールおよび構成については、以下の資料を参照してください。

- **z/OS ホストのインストール:** Rational Developer for System z Program Directory
- **z/OS ホストの構成 (基本):** Rational Developer for System z ホスト構成クイック・スタート・ガイド
- **z/OS ホストの構成 (詳細):** Rational Developer for System z ホスト構成ガイド
- **バックグラウンドおよびサポート対象 z/OS ホストの構成情報:** Rational Developer for System z ホスト構成リファレンス
- **基本および共通の z/OS のオプションのホスト・カスタマイズ:** Rational Developer for System z ホスト構成ユーティリティー・ガイド
- **AIX のインストール:** Rational Developer for System z RSE サーバー インストールおよび構成: AIX
- **Linux のインストール:** Rational Developer for System z RSE サーバー インストールおよび構成: Linux
- **Linux on System z のインストール:** Rational Developer for System z RSE サーバー インストール・ガイド: Linux on System z
- **AIX on Power® システムおよび Linux on Power システムのインストール:** Rational Developer for System z RSE サーバー インストール・ガイド: AIX and Linux on Powers Systems
- **クライアントのインストール:** Rational Developer for System z インストール・ガイド

注: Linux 64 ビット・オペレーティング・システムへのインストール時の考慮事項は、次のとおりです。

- 11 ページの『Linux 64 ビット・オペレーティング・システム上で稼働している Rational Developer for System z での問題』
- 13 ページの『COBOL インポーターを使用するフィーチャーが正常に機能しません』
- 15 ページの『IBM Installation Manager をインストールできない、または開始できない』
- 17 ページの『パースペクティブの「ようこそ」ページが空です』

最新バージョンの完全な文書については、インストールの説明、ホワイト・ペーパー、ポッドキャストおよびチュートリアルも含め、Rational Developer for System z Web サイト (<http://www-01.ibm.com/software/rational/products/developer/systemz/library/>) のライブラリー・ページを参照してください。

注:

Rational Developer for System z を使用している場合、インストールおよび構成ガイドは、*IBM Rational Developer for System z クイック・スタート・ディスク* にも収められています。

Rational Developer for System z を使用している場合、ホストのインストールおよび構成ガイドは、*IBM Rational Developer for System z Server for z/OS and Multiplatforms インストール DVD* にも収められています。

Rational Developer for zEnterprise を使用している場合、インストールおよび構成ガイドは、*IBM Rational Developer for zEnterprise クイック・スタート・ディスク*にも収められています。

Rational Developer for zEnterprise を使用している場合、ホストのインストールおよび構成ガイドは、*IBM Rational Developer for zEnterprise Server for z/OS and Multiplatforms インストール DVD*にも収められています。

## Web ベース・ヘルプ

- 21 ページの『第 1 章 Web ベースのヘルプ・コンテンツ』
  - 22 ページの『Web ベース・ヘルプへのアクセス』
  - 23 ページの『ローカル・ヘルプ更新プログラムと RDz8.0\_updateSite.zip ファイルを使用してヘルプ・コンテンツをローカル側にインストールする方法』
  - 24 ページの『ヘルプ・コンテンツの更新』
  - 25 ページの『ヘルプ・コンテンツの除去』
  - 25 ページの『ヘルプ・コンテンツ用のイントラネット・サーバーのセットアップ』
  - 26 ページの『ヘルプ・コンテンツへのアクセス方法の変更』

## コンテキスト・ヘルプ

- Rational Developer for System z クライアントを Windows 上で使用している場合は、F1、Ctrl-F1、または Shift-F1 を使用してコンテキスト・ヘルプを開きます。
- Rational Developer for System z クライアントを Linux 上で使用している場合は、Ctrl-F1 または Shift-F1 を使用してコンテキスト・ヘルプを開きます。
- 以前のリリースでは、コンテキスト・ヘルプにアクセスすると現在のコンテキストに固有のコンテキスト・ヘルプが表示され、ダイナミック・ヘルプのセクションに、関連する可能性がある検索結果が示されていました。 Rational Developer for System z v8.0.3 では、コンテキスト・ヘルプにアクセスすると現在のコンテキストに固有のコンテキスト・ヘルプが表示され、新しい「検索」リンクにより、フォーカスがあるビューまたはダイアログの名前に基づいて、さらに結果を検索できます。
- EXEC CICS<sup>®</sup>、EXEC SQL および EXEC DLI ステートメントの言語依存ヘルプを使用可能にするには、31 ページの『第 2 章 EXEC CICS、EXEC SQL、および EXEC DLI ステートメントの言語依存ヘルプの使用可能化』を参照してください。
  - 32 ページの『Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールおよび初期化』
  - 33 ページの『CICS Transaction Server インフォメーション・センターのインストールおよび初期化』

## バージョン 8.0.3 の新機能

IBM Rational Developer for System z リリース 8.0.3 には、新機能が追加されています。これらの機能拡張について詳しくは、Rational Developer for System z の新機能 (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r0/index.jsp?topic=/com.ibm.etools.getstart.wsentdev.doc/topics/whatsnew80.html>) を参照してください。

## バージョン 8.0.3 の制限と既知の問題

Rational Developer for System z での制限と既知の問題については、以下の要約を参照してください。

- 37 ページの『第 3 章 制限: Rational Developer for System z Windows 7 クライアントで Rational Developer for System z の「ライセンス管理 (Manage Licenses)」パネルを使用していると、JavaIOException エラーが発生します』
- 39 ページの『第 4 章 制限: push-to-client 更新は、「リモート・システム」ビューを使用して確立されたりリモート・システム接続でのみサポートされています』
- 41 ページの『第 5 章 制限: Rational Developer for System z v8.0.1 の push-to-client が Installation Manager v1.4.3 以降で機能しません』
- 制限: Rational Developer for System z Refactor/Rename を使用している場合、変更が加えられたことが示されません。示されなくても、変更は加えられて、元のメンバーのホスト上に保存されます。
- 制限: リモート索引検索は DBCS または双方向ファイルの検索をサポートしません。
- 制限: VMware ESX にホストされている SLED/SLES 10 64 ビット上で実行されている Rational Developer for System z クライアントはサポートされません。
- 制限: 新規ビルドの最初のワークスペースで初めてヘルプに接続する際、いくつかの索引付けエラーがエラー・ログに記録されます。これらのエラーは無視できます。これらのエラーを生成する条件により、Rational Developer for System z 内のヘルプにアクセスする機能が影響を受けることはありません。

### z/OS 統合開発環境

- 43 ページの『制限: z/OS V1R10 より前の JES3 リリースでは、アクティブ・ジョブの出力の取得機能がサポートされていません』
- 制限: MVS™ リソースに対する「参照」アクションおよび「表示」アクションは、一部のタイプのエディターでのみサポートされます。

### BMS Screen Designer (BMS マップ・エディター) および MFS Screen Designer (MFS エディター)

- 47 ページの『制限: 代替マップ名を変更または除去すると、BMS エディターのソース・ページ内の Developer for System z スタイルのコメントはプロパティを確実に更新しません』
- 48 ページの『制限: 代替構造開始レベルを変更または除去すると、BMS エディターのソース・ページ内の Developer for System z スタイルのコメントは BMS マップのプロパティを確実に更新しません』
- 47 ページの『制限: Linux システム上、またはネイティブ言語以外のシステム上で編集すると、UTF-8 以外の文字を使用した BMS マップで、ソースの構文解析エラーが表示される可能性があり、また、シンボリック・マップの生成時に構文解析エラーと字句エラーが発生する可能性があります』
- 制限: リモート・リソースについては、BMS および MFS エディター用の別名保存はサポートされていません。
- 47 ページの『制限: Linux SUSE 10 上で開くと、BMS および MFS フィールドが「デザイン」ページに正しく表示されないことがあります』



## Service Component Architecture

- 45 ページの『制限: Web サービス・バインディングの URI を編集してリソースを保存しても WSDL ファイルが更新されません』

## CICS

- 49 ページの『制限: 無視できるエラー・メッセージ』
- 57 ページの『制限: メッセージが生成されないエラー』
- 65 ページの『制限: 「CICS バンドルのデプロイ」ウィザードを使用して CICS バンドルをデプロイすると、Java で NullPointerException が発生したことを報告する詳細情報を伴ってエラーが発生する可能性があります』

## File Manager Integration

注: Developer for System z v8.0.3 で非推奨になっている File Manager Integration 機能は、現在 Eclipse 用 IBM File Manager プラグインで提供されています。

Eclipse 用 IBM File Manager プラグインの入手について詳しくは、File Manager plug-in for Eclipse を参照してください。Eclipse 用 IBM File Manager プラグインをインストールする前に、Developer for System z FMI フィーチャーをアンインストールします。Eclipse 用 IBM File Manager プラグインには、File Manager の統合を実現するための、独自のパースペクティブおよび関連ビューがあります。

- 67 ページの『File Manager Integration でフォーマット済みデータ・エディター内の一部のビューが名前変更されました』
- 67 ページの『制限: 基準作成ビルダーで作成した特定の複雑な基準がサポートされません』
- 67 ページの『制限: データ・セットを保存したときにデータが失われ、RSE 接続が失われます』
- 67 ページの『制限: REPLACING 文節を伴う COPY コマンドが入っている COBOL コピーブックでのテンプレートの作成』
- 制限: 編集セッション中にホストへのネットワーク接続が、異常により失われた場合、データ・セットがロックされて、二度と開くことができなくなる可能性があります。システム管理者に連絡して、データ・セットを解放してください。
- 制限: File Manager Integration は、Linux 上で実行されている Developer for System z クライアントではサポートされません。

## COBOL のコード・レビュー

- 69 ページの『制限: COBOL のコード・レビューは、エディター・セッションで開かれている場合に限り、リモート COBOL ファイルに対して実行することができます』
- 69 ページの『制限: 「ソフトウェア・アナライザー構成 (Software Analyzer Configuration)」ダイアログの「規則 (Rules)」タブで、COBOL ルール・セットのコンテキスト・ヘルプは現在使用できません』
- 69 ページの『制限: 「ソフトウェア・アナライザー設定のカスタム規則およびカテゴリ (Software Analyzer Preferences Custom Rules and Categories)」ページのインポート機能は、定義済みの既存のカテゴリおよび規則がない場合にのみ、最初に使用します』

- 制限: COBOL コード・レビューからの結果を確認する場合: COBOL ソース・ファイルが Developer for System z LPEX エディターで開かれていると、注釈アイコンにカーソルを合わせたときに、分析が実行された各インスタンスの注釈テキストが重複します。
- 制限: HTML ファイルに結果レポートを生成すると、外部ブラウザーに表示された場合にのみ保存されます。「ファイル」->「別名保存...」アクションを使用します。
- 制限: 生成された結果レポートの保存先を指定する場合は、デフォルト (`¥workspace¥.metadata¥.plugins¥com.ibm.xtools.analysis.reporting¥reports¥codereview_cobol_result_report`) 以外のフォルダーに保存する必要があります。そうしないと、後続のレポート生成により、ファイルが上書きされます。
- 制限: 生成された結果レポートの下部にある「表示する結果はありません (No results to display)」というメッセージを無視します。

### COBOL 言語サポート

- 71 ページの『制限: COBOL エディターでコンテンツ・アシストを使用すると、IF ステートメントまたはその変化形が、SQL ステートメントの直後のコンテンツ・アシストに表示されません』
- 制限: System z LPEX エディターを使用する場合、リファクタリング操作を元に戻すことができません。
- 制限: System z LPEX エディターまたは COBOL エディターを使用する場合、「実行階層を開く」操作は、ソース・ファイルが変更されるか、または閉じられた場合に、同期化されません。
- 制限: ローカルの COBOL ネイティブ・コンパイラーは、Windows 7 環境ではサポートされません。COBOL ローカル構文検査は Windows 7 でサポートされます。
- 制限: COBOL エディターの操作時に、「切り替えマークのオカレンス (Toggle Mark Occurrences)」ツールバー・ボタンが 2 つ表示されます。このエディターを操作するこのボタンは、「エディター表示 (Editor Presentation)」アクション・セット内の、「16 進数編集の切り替え (Toggle Hex Editing)」および「ブロック・セクション・モードの切り替え (Toggle Block Selection Mode)」ツールバー・ボタンの間にあります。
- 制限: COBOL エディターは、エディターの内容の MVS システム上の新規ファイルへの保存をサポートしていません。

### PL/I 言語サポート

- 73 ページの『制限: System z LPEX エディターまたは PL/I エディターを使用する場合、構文検査でエラーが誤って識別されます』
- 73 ページの『制限: 「宣言を開く」や吹き出しヘルプのようなエディター・ツールは、名前が PL/I キーワードである PL/I 変数に対して機能しません』
- 制限: リモート DBCS 文字は PL/I エディターによってサポートされません。DBCS コード・ページでエンコードされたファイルは、読み取り専用としてのみ開くことができます。これらのファイルを編集するには、System z LPEX エディターを使用してください。

- 制限: リモート双方向文字は PL/I エディターによってサポートされません。双方向コード・ページでエンコードされたファイルは、読み取り専用としてのみ開くことができます。これらのファイルを編集するには、System z LPEX エディターを使用してください。
- 制限: ローカルの PL/I ネイティブ・コンパイラーは、Windows 7 環境ではサポートされません。PL/I ローカル構文検査は Windows 7 でサポートされます。
- 制限: PL/I エディターの操作時に、「切り替えマークのオカレンス (Toggle Mark Occurrences)」ツールバー・ボタンが 2 つ表示されます。このエディターを操作するこのボタンは、「エディター表示 (Editor Presentation)」アクション・セット内の、「16 進数編集の切り替え (Toggle Hex Editing)」および「ブロック・セクション・モードの切り替え (Toggle Block Selection Mode)」ツールバー・ボタンの間にあります。
- 制限: PL/I エディターは、エディターの内容の MVS システム上の新規ファイルへの保存をサポートしていません。

### C/C++ 言語サポート

- 制限: System z C/C++ エディターは、シーケンス番号の保守を行いません。シーケンス番号のあるファイルの編集には、System z LPEX エディターを推奨します。

### コンパイル済み言語デバッガー

- 75 ページの『制限: アクティブなデバッグ・セッションがあるときに F5 キーを押すと、デバッガーは、更新アクションを実行するのではなく、ステップイントゥを実行します』
- 75 ページの『制限: エディター内で、属性名にカーソルを合わせるときに表示される変数は、変更できません』

### 共通アクセス・リポジトリ・マネージャー (CARMA)

- 制限: z/OS サブプロジェクトが RAM レベルで CARMA へ関連付けられている場合、CARMA はサブプロジェクト・レベルでプロジェクト・プロパティーを更新する機能を失います。ただし、CARMA はデータ・セット・レベルおよびメンバー・レベルでプロジェクト・プロパティーを更新する機能を引き続き保持します。

### Application Deployment Manager

- 制限: CICS リソース定義サーバーへの接続時の、CICS エクスプローラー・ビュー内のリソースのフィルター操作は、リソースの名前に制限されます。
- 79 ページの『制限: Web サービス接続タイプを使用する CICS リソース定義サーバーは、新しい CICS リソース・タイプをサポートしません』
- 79 ページの『制限: コードまたは CICS リソースを生成するダイアログにリストされるのは、CICS リソース定義サーバーをホストする領域 (接続領域) のみです』
- 79 ページの『制限: CICS リソース定義 (CRD) サーバーへの既存接続のパスワードを変更できません』

### Software Configuration Library Manager (SCLM) Developer Toolkit

- 81 ページの『制限: z/OS 1.8 では SCLM 検索および SCLM メンバー・セキュリティがサポートされません』
- 制限: z/OS ホスト接続は、SCLM メンバー編集の前にアクティブにする必要があります。

### AIX、Linux、および Linux on System z

- 83 ページの『制限: Linux on System z 上で Installation Manager を実行する場合は、ルート・ユーザーとして Installation Manager を実行します』
- Rational Developer for System z リモート・システム・エクスプローラー (RSE) サーバーを AIX、x86 Linux、および Linux on System z で始動するには、いずれかのバージョンの Perl をインストールする必要があります。
- 制限: Linux on System z では、統合デバッグ・サポートはありません。
- 83 ページの『制限: z/OS UNIX サブシステム用および Linux on System z システム用のリモート・シェルは、全フィーチャーを備えたシェルではなく、すべてのシェル・コマンドが期待どおりに動作するとは限りません。』
- 83 ページの『制限: 一部の Rational Developer for System z フィーチャーは、Linux 環境でサポートされていません』
- 83 ページの『制限: Rational Developer for System z を Linux 環境で使用している場合に、コンテンツ・アシストが Ctrl-space キーで動作しません』
- 84 ページの『制限: 「新規ローカル/リモート・アクション」 ボタンが使用できません』

### 双方向言語サポート

- 制限: Rational Developer for System z v8.0.3 の一部のフィーチャーには、双方向言語サポート機能がありません。

### エンタープライズ・サービス・ツール

- 単一サービス・プロジェクト
  - 87 ページの『制限: ミート・イン・ミドルのマッピング・ファイルの表示が空白になります』
  - 87 ページの『制限: トップダウン・シナリオ以外では、PL/I コンパイル済み XML 変換が、XML 属性のマッピングまたは生成をサポートしません』
  - 87 ページの『制限: 01 レベルのスカラー・エレメントがサポートされていません』
  - 87 ページの『制限: PL/I コンパイル済み XML 変換が、オプションの「調整あり」または「調整なし」属性に従いません』
  - 87 ページの『制限: 古い WSDL/XSD ファイルおよび新規 WSDL/XSD ファイルでのボトムアップ競合』
  - 88 ページの『制限: z/OS のみで稼働する単一サービス・ウィザードによって生成される COBOL 変換ルーチン』
  - 88 ページの『制限: スキーマをインクルード、インポート、または再定義するリモート (z/OS UNIX) WSDL ファイルのインポートを伴うトップダウン/ミート・イン・ミドル・シナリオはサポートされません』
  - 88 ページの『制限: XML エレメントのネストの深さ』
  - 89 ページの『制限: OPT コンパイラー・オプションの競合』

- 89 ページの『制限: 「XML 使用可能化」ウィザードの特定のテキスト入力フィールドにおける大/小文字の区別』
- 89 ページの『制限: 無効なポインターによる無限ループ』
- 89 ページの『制限: COBOL データ構造内の FILLER 項目』
- 89 ページの『制限: 「生成」>「XML ファイル」メニュー項目が XSD スキーマの制限を順守しません』
- 90 ページの『制限: XML および Web サービスのバッチ・プロセッサ: 構成 XML に無効な項目があると、バッチ・プロセスの実行中に NULL ポインター例外が発生することがあります』
- 90 ページの『制限: 表意定数 LOW-VALUES および HIGH-VALUES に関する制限』
- 90 ページの『制限: 一時ファイルが必ずしもクリーンアップされません』
- 90 ページの『制限: 一時プロジェクトが必ずしもクリーンアップされません』
- 91 ページの『制限: バージョン 6.0 マッピング・ファイル (.cmx ファイル) をマイグレーションするとき、.cmx ファイルで参照されるソース・ファイルが同じフォルダー内になければなりません』
- 91 ページの『制限: SOAP for CICS および Web Services for CICS での DBCS データ・メンバーのサポート』
- 91 ページの『制限: 生成された XML コンバーター・ファイルの名前に DBCS 文字を使用できません』
- 91 ページの『制限: 生成された XML スキーマのグローバル・エレメント名が、解釈 XML 変換タイプとコンパイル済み XML 変換タイプとの間で矛盾します』
- 92 ページの『制限: Enterprise COBOL で、OPTIMIZE (OPT) オプションを使用して COBOL XML コンバーターをコンパイルしたときに、メッセージ IGYOP3094 が発行されます』
- サービス・フロー・プロジェクト
  - 92 ページの『制限: サービス・フロー・プロジェクトから生成された Web サービスが、それ自体を呼び出すこと (再帰呼び出し) ができません』
  - 93 ページの『制限: それ自体へ戻るようにワイヤリングされた接続についての制限』
  - 93 ページの『制限: パスまたはファイル名に英語以外の文字が含まれていると、COBOL コピーブック・ファイルのインポートが失敗します』
  - 94 ページの『制限: 競合するメッセージおよびフィールド名によりコンパイル・エラーが発生します』
  - 94 ページの『制限: usage 文節が POINTER のインポート済みソース・コードに関する制限事項』
  - 94 ページの『制限: 画面メッセージが簡単に置き換わりません』
  - 94 ページの『制限: COBOL プログラムを「チャンネルでの LINK」ノードとして使用するためにインポートし、操作エディターで操作を開くと、生成プロパティを変更できません』
  - 制限: while ループで始まり、入力アクションを含んでいるフローは、正しく再生されません。



---

## Linux 64 ビット・オペレーティング・システム上で稼働している Rational Developer for System z での問題

このトピック・グループには、Linux 64 ビット・オペレーティング・システム上で稼働している Rational Developer for System z で起こり得る問題の解決法と回避策が記載されています。

注: Rational Developer for System z は、Linux 64 ビット・オペレーティング・システム上で、32 ビット互換モードで実行されます。

Linux 64 ビット・オペレーティング・システム、そのバージョン、および Rational Developer for System z でサポートされる更新レベルのリストについては、「*IBM Rational Developer for System z 8.0.3: インストール・ガイド*」を参照してください。





---

## COBOL インポーターを使用するフィーチャーが正常に機能しません

この問題を解決するには、Linux インストール・ディスクまたはパッケージ・リポジトリから、必要な 32 ビット Linux パッケージをインストールします。

注: サポートされる 64 ビット Linux オペレーティング・システムで Developer for System z を実行するための前提条件となる 32 ビット Linux パッケージの一部のリストについては、「*IBM Rational Developer for System z バージョン 8.0.3: インストール・ガイド*」を参照してください。

### オペレーティング・システム:

- Red Hat Enterprise Linux V6 64 ビット

**問題:** COBOL インポーターを起動する Rational Developer for System z のフィーチャーが、正常に動作しないか、完全に失敗する。これらのフィーチャーには、以下のものがあります。

- COBOL ソース・ファイルのローカル構文検査。
- エンタープライズ・サービス・ツール: 多数のソース・コード生成シナリオ。
- インポーターを使用するその他のフィーチャー。

### 症状:

- COBOL インポーターに依存するフィーチャーが正常に機能しないか、失敗する。
- インポーターを実行できないことを示すエラー・メッセージがエラー・ログに含まれている。次に例を示します。

```
java.io.IOException: Cannot run program "/opt/IBM/SDPShared/plugins/
com.ibm.etoools.cobol.linux_7.1.0.v20100921_2345/importer/IGYCCOB2"
(in directory "/root/IBM/rationalsdp/workspace/e1/.metadata/.plugins/
com.ibm.etoools.cobol/1302111800579"):
java.io.IOException: error=2, No such file or directory.
```

**分析:** COBOL インポーターには、32 ビット・バージョンの Linux オペレーティング・システム・ライブラリーが必要です。これらのライブラリーの一部は、Red Hat Enterprise Linux V6 64 ビットではデフォルトでインストールされません。

### 解決法:

この問題を解決するには、次のようにします。

1. Linux インストール・ディスクまたはパッケージ・リポジトリから、32 ビット・パッケージ `redhat-lsb-4.0-2.1.el6.i686` をインストールします。例えば、端末ウィンドウのコマンド行から、次のコマンドを入力します。

```
yum install redhat-lsb-4.0-2.1.el6.i686
```

2. Rational Developer for System z を閉じてから再度開きます。

これで、COBOL インポーターに依存する Rational Developer for System z  
が正常に機能するはずです。

---

## IBM Installation Manager をインストールできない、または開始できない

この問題を解決するには、Linux インストール・ディスクまたはパッケージ・リポジトリから、必要な 32 ビット Linux パッケージをインストールします。

注: サポートされる 64 ビット Linux オペレーティング・システムで Developer for System z を実行するための前提条件となる 32 ビット Linux パッケージの一部のリストについては、「*IBM Rational Developer for System z バージョン 8.0.3: インストール・ガイド*」を参照してください。

### オペレーティング・システム:

- Red Hat Enterprise Linux V6 64 ビット

**問題:** IBM Installation Manager をインストールまたは開始しようとする、以下の例のようなエラー・メッセージを受け取ります。この例では、Installation Manager のインストール・ファイルが含まれるディレクトリから、端末ウィンドウで次の `install` コマンドが実行されました。

```
[root@zahar-rhel64 IMinstallKit]# ./install
bash: ./install: /lib/ld-linux.so.2: bad ELF interpreter:
No such file or directory
```

**分析:** Installation Manager には、32 ビット・バージョンの Linux オペレーティング・システム・ライブラリーが必要です。これらのライブラリーの一部は、Red Hat Enterprise Linux V6 64 ビットではデフォルトでインストールされません。

### 解決法:

この問題を解決するには、Linux インストール・ディスクまたはパッケージ・リポジトリから、以下の 32 ビット・パッケージをインストールします。

- `libgtk-x11-2.0.so.0`
- `libpk-gtk-module.so`
- `libcanberra-gtk-module.so`

例えば、端末ウィンドウのコマンド行から、次のコマンドを入力します。

```
yum install libgtk-x11-2.0.so.0
```

これを、上記に示したすべてのパッケージに対して行います。

これで、Installation Manager が正常にインストールされて開始されたはずです。



## パースペクティブの「ようこそ」ページが空です

この問題を解決するには、Linux インストール・ディスクまたはパッケージ・リポジトリから、必要な 32 ビット Linux パッケージをインストールします。

注: サポートされる 64 ビット Linux オペレーティング・システムで Developer for System z を実行するための前提条件となる 32 ビット Linux パッケージの一部のリストについては、「*IBM Rational Developer for System z* バージョン 8.0.3: インストール・ガイド」を参照してください。

### オペレーティング・システム:

- Red Hat Enterprise Linux V5 または V6 の 64 ビット
- SUSE Linux Enterprise V10 または V11 の 64 ビット

**問題:** 新しい作業域で最初にパースペクティブを開くときに、そのパースペクティブの「ようこそ」ページが空で、「ようこそ」タブを閉じるときにエラー・メッセージが表示される。

### 症状:

1. 上記のように、パースペクティブの「ようこそ」ページが空である。
2. 「ようこそ」タブを閉じると「**問題の発生**」というエラー・ウィンドウが開き、次のエラー・メッセージが表示される。

```
Unhandled event loop exception
No more handles [Unknown Mozilla path (MOZILLA_FIVE_HOME not set)]
```

3. このウィンドウを閉じると「**内部エラー**」ウィンドウが開き、次のエラー・メッセージが表示される。

```
An SWT error has occurred.
You are recommended to exit the workbench.
```

**分析:** 「ようこそ」ページには、32 ビット・バージョンの Linux オペレーティング・システム・ライブラリーが必要です。これらのライブラリーの一部は、Linux 64 ビット・オペレーティング・システムのインストール時にはデフォルトでインストールされません。

### 解決法:

この問題を解決するには、次のようにします。

1. Linux インストール・ディスクまたはパッケージ・リポジトリから、以下の必要な 32 ビット・パッケージをインストールします。

表 1. 必要な 32 ビット・パッケージ

オペレーティング・システム:	32 ビット・パッケージ:
Red Hat Enterprise Linux V5 または V6 の 64 ビット	xulrunner.i686
SUSE Linux Enterprise V10 64 ビット	mozilla-xulrunner-32bit
SUSE Linux Enterprise V11 64 ビット	mozilla-xulrunner190-32bit

次に例を示します。

- Red Hat Enterprise Linux V5 または V6 の 64 ビットの場合は、端末ウィンドウのコマンド行で、次のコマンドを入力します。

```
yum install xulrunner.i686
```

- SUSE Linux Enterprise V10 64 ビットの場合は、次を入力します。

```
zypper install mozilla-xulrunner-32bit
```

- SUSE Linux Enterprise V11 64 ビットの場合は、次を入力します。

```
zypper install mozilla-xulrunner190-32bit
```

2. Rational Developer for System z を閉じてから再度開きます。

これで、「ようこそ」ページが正常に機能するはずです。

---

## Web ベース・ヘルプ





---

## 第 1 章 Web ベースのヘルプ・コンテンツ

Rational Developer for System z のヘルプ・システムは、リモート・ヘルプを使用するように構成されるため、Web から動的にコンテンツをプルできます。Web 配信ヘルプを使用すると、Rational Developer for System z 内から常に最新のコンテンツを入手できます。一部のヘルプ・システムは、Web 上のヘルプ・コンテンツにアクセスするように構成されていません。このような場合、ヘルプ・コンテンツはインストール時に一緒に組み込まれます。

ヘルプを取得するには、3 つの方法があります。最適なオプションは以下のいずれか 1 つで、ニーズと状態に応じて異なります。

- **Web からヘルプにアクセスする (Access help from the Web)** - 最小のインストール占有スペースで最新の情報を取得できるように、Web 上でヘルプ・コンテンツにアクセスできます。
- **ヘルプをダウンロードし、そのコンテンツにローカル側でアクセスする (Download help and access the content locally)** - インストール時に限られたヘルプ・コンテンツだけが組み込まれます。最初に製品を始動したとき、インターネットに接続していれば完全なオンライン・ヘルプがダウンロードされ、インストールされます。以後の始動時には、ヘルプに使用可能な更新がダウンロードされ、インストールされます。インターネットから切断された状態で定期的な更新により作業できるように、ヘルプ・コンテンツをコンピューターにダウンロードしてアクセスできます。インターネットに接続できない場合は、ローカル・ヘルプ更新プログラムおよびクイック・スタート・ディスクの `install_localhelp` ディレクトリーにある `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用して、ヘルプ・コンテンツをインストールする必要があります。ローカル・ヘルプ更新プログラムと `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用して、ヘルプをローカル側にインストールする方法について詳しくは、23 ページの『ローカル・ヘルプ更新プログラムと `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用してヘルプ・コンテンツをローカル側にインストールする方法』を参照してください。

注: 最新バージョンの `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルは、  
<http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rational/sdp/documentation/updatesites/> の更新ダウンロード・サイトから入手できます。

- **イントラネット上のサーバーからヘルプにアクセスする (Access help from a server on your intranet)** - ファイアウォールに守られた環境で管理更新により作業できるように、ヘルプ・コンテンツをイントラネット・サーバー上にデプロイできます。

アクセスに関する決定は、いつでも変更できます。複数の製品を一緒にインストールする場合、インストール占有スペース、使用頻度、およびインターネット・ポリシーに応じて、各製品ごとにヘルプ用に異なる場所を使用できます。インターネット速度に問題がある場合、1 回のダウンロードに要する時間が長くなるため、ローカル・アクセスを使用する方が適切な場合があります。最新のヘルプ更新には、差分のみが含まれます。

管理者の立場で、ユーザーがイントラネット・サーバーからヘルプ・コンテンツにアクセスするように設定する場合、サーバーでのヘルプ WAR ファイルのインストール方法については、「Installation Manager インフォメーション・センター」を参照してください。Installation Manager インフォメーション・センターで、「インストールおよびアップグレード (Installing and upgrading)」->「エンタープライズ・インストール項目 (Enterprise installation articles)」->「イントラネット・サーバーからのヘルプ・コンテンツの配信 (Delivering help content from an intranet server)」を選択します。

---

## Web ベース・ヘルプへのアクセス

Rational Developer for System z のヘルプは、インターネット上の製品インフォメーション・センターで利用可能です。このヘルプは、Rational Developer for System z 内から表示できます。

### 始める前に

インストール時に、リモート・インフォメーション・センターにあるヘルプにアクセスするためのオプションを選択しました。このオプションはデフォルトの選択項目です。

### このタスクについて

Rational Developer for System z ヘルプ・システムは、製品と一緒にインストールされたコンテンツだけでなく、インフォメーション・センターを実行しているリモート・サーバーからもコンテンツを取り出すことができます。Rational Developer for System z のインフォメーション・センターには最新のヘルプ・コンテンツが置かれており、Rational Developer for System z がリモート・インフォメーション・センターからコンテンツを取り出すように構成されている場合は、「ヘルプ」>「ヘルプ目次」を選択することにより、インフォメーション・センターのコンテンツにアクセスできます。

インストール時に、Rational Developer for System z は製品インフォメーション・センターにあるヘルプにアクセスするように構成されました。

Rational Developer for System z のインフォメーション・センターは、以下の Web アドレスから利用可能です。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r0/index.jsp>

以下のステップに従って、インフォメーション・センターへの接続を確認してください。

### 手順

1. 「設定」ダイアログを開きます。
2. 「ヘルプ」>「目次」を選択します。
3. Rational Developer for System z インフォメーション・センターの URL が、選択可能なインフォメーション・センターのリストにあることを確認します。  
Rational Developer for System z インフォメーション・センターがリストにない場合は、以下のステップを実行します。

- a. 「新規」をクリックします。
- b. 「名前」フィールドに、接続の名前を入力します。
- c. 「URL」フィールドに、`http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r0` を入力します。
- d. 「接続のテスト」をクリックします。
- e. 「接続のテスト」が正常に完了したら、「OK」をクリックします。「接続のテスト」が失敗した場合は、入力した URL を確認して再試行します。

---

## ローカル・ヘルプ更新プログラムと RDz8.0\_updateSite.zip ファイルを使用してヘルプ・コンテンツをローカル側にインストールする方法

リモート・ヘルプを使用して Web からヘルプ・コンテンツにアクセスせず、インターネットにアクセスできない場合は、ヘルプ・コンテンツをローカル側にインストールする必要があります。このトピックでは、ローカル・ヘルプ・システム更新プログラム、およびインストール・イメージに提供される RDz8.0\_updateSite.zip ファイルを使用して、ヘルプ・コンテンツをインストールする方法を説明します。RDz8.0\_updateSite.zip ファイルは、IBM Rational Developer for System z クイック・スタート・ディスクに入っています。

### 始める前に

インストール時に、ヘルプ・アクセス・オプション「ヘルプをダウンロードしてコンテンツにローカルにアクセス」を選択しました。

### このタスクについて

製品のヘルプを使用する前に、ヘルプをローカル・システムにインストールする必要があります。

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムおよび RDz8.0\_updateSite.zip ファイルを使用してヘルプ・コンテンツをワークステーションにインストールするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. ファイル RDz8.0\_updateSite.zip の内容をシステム上の一時的な場所に解凍します。この場所を覚えておいてください。
2. Windows Internet Explorer をデフォルトのブラウザとして使用して IBM Rational Developer for System z を開き、「ヘルプ」>「ローカル・ヘルプ更新プログラム」をクリックします。ローカル・ヘルプ更新プログラムが開きます。
3. 解凍した RDz8.0\_updateSite.zip ファイルの場所を指定します。
  - a. 「サイト」プルダウンから「内部サイト」を選択します。
  - b. 「+」アイコンを選択して、場所を追加します。
  - c. 「ローカル」を選択します。
  - d. サイトの名前を入力します。
  - e. 「参照」をクリックして、RDz8.0\_updateSite.zip の内容を解凍した場所を参照します。

- f. 「site.xml」ファイルをダブルクリックしてから、「OK」をクリックします。進行状況表示バーが開き、RDz8.0\_updateSite.zip ファイルに含まれている使用可能なフィーチャーをローカル・ヘルプ更新プログラムが検索する状況が追跡されます。指定した内部サイトが作成され、「使用可能なコンテンツ」ペインの「サイト・リスト (Site List)」に表示されます。
  - g. 作成した内部サイトを選択します。ダウンロードに使用可能な Rational Developer for System z ドキュメンテーション・フィーチャーが表示されます。
4. インストールしたい IBM Rational Developer for System z 資料を選択します。この時点で、「インストール」ボタンがアクティブになります (ぼかし表示でなくなります)。
  5. 「インストール」をクリックします。進行状況表示バーが開き、インストールの状況が追跡されます。
  6. インストールが完了したら、Rational Developer for System z をいったん閉じて、再始動します。
  7. 「ウィンドウ」 > 「プリファレンス」を選択し、「ヘルプ」 > 「内容」を選択します。ローカルのインフォメーション・センターが有効になっていることを確認します。「プリファレンス」ウィンドウを閉じます。
  8. 「ヘルプ」 > 「ヘルプ目次」を選択して、製品のヘルプを開きます。

## タスクの結果

ローカル側にインストールするために選択したヘルプが、ご使用のシステムにインストールされ、使用可能になります。

---

## ヘルプ・コンテンツの更新

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを使用して、確実にヘルプ・コンテンツを最新の状態にしておいてください。

### 始める前に

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムの Web サイトからのヘルプ・フィーチャーのインストールが完了しています。

### このタスクについて

インターネットに接続している場合、更新は製品を始動するたびに自動的にインストールされます。

製品を再始動せずにヘルプを更新するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 製品のヘルプ・システム・ウィンドウを閉じます。
2. ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを開くために、「ヘルプ」 > 「ローカル・ヘルプ更新プログラム」を選択します。更新プログラムのサイトが開きます。
3. 「インストール済みフィーチャー」タブをクリックします。

4. 「更新の検索」をクリックします。 インストール済みのコンテンツに更新がある場合は、それらの更新がシステムにインストールされます。進行状況表示バーに要求の状況が示されます。
5. 更新が完了したら、「ヘルプ」 > 「ヘルプ目次」を選択して、製品内でヘルプを開きます。

---

## ヘルプ・コンテンツの除去

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを使用して、インストール済みのヘルプ・コンテンツを除去できます。

### 始める前に

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを使用して、ヘルプ・フィーチャーのダウンロードが完了しています。

### このタスクについて

インストール済みのヘルプ・コンテンツを除去するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 製品のヘルプ・システム・ウィンドウを閉じます。
2. ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを開くために、「ヘルプ」 > 「ローカル・ヘルプ更新プログラム」をクリックします。 更新プログラムのサイトが開きます。
3. 「インストール済みフィーチャー」ペインで、除去したいフィーチャーを選択し、「除去」をクリックします。 選択したヘルプ・フィーチャーがシステムから除去されます。進行状況表示バーに要求の状況が示されます。
4. 除去が完了したら、「ヘルプ」 > 「ヘルプ目次」を選択して、製品内でヘルプを開きます。

---

## ヘルプ・コンテンツ用のイントラネット・サーバーのセットアップ

ユーザーにヘルプ・コンテンツを提供するために、イントラネット・サーバーをファイアウォールの背後にセットアップすることができます。この方法では、ユーザーはヘルプ・コンテンツを自分のコンピュータにダウンロードして保存する必要がありません。

### 始める前に

ファイアウォールの背後にいるユーザーがアクセスできるサーバーを使用可能にします。

### このタスクについて

ヘルプ・コンテンツ用にイントラネット・サーバーをセットアップする方法については、Installation Manager インフォメーション・センターを参照してください。Installation Manager インフォメーション・センターで、「インストールおよびアップグレード (Installing and upgrading)」->「エンタープライズ・インストール項目

(Enterprise installation articles)」 -> 「イントラネット・サーバーからのヘルプ・コンテンツの配信 (Delivering help content from an intranet server)」を選択します。

---

## ヘルプ・コンテンツへのアクセス方法の変更

ヘルプ・コンテンツにアクセスする方法を変更できます。

Rational Developer for System z を使用している場合は、リモートでヘルプ・コンテンツにアクセスできます (ヘルプ・コンテンツが Web 上またはイントラネットのサーバー上にある場合)。または、ご使用のワークステーションにヘルプ・コンテンツをダウンロードしてインストールし、ローカルでヘルプにアクセスすることもできます。ローカルにインストールすると、Rational Developer for System z では、これらのアクセス方式のどちらを使用するか選択できます (デフォルトは、Web 上のヘルプ・コンテンツにリモートでアクセスする方式です)。

ヘルプ・コンテンツにアクセスする方法を変更する前に、ヘルプ・ブラウザを閉じてください。

インストール処理時に、ヘルプ・コンテンツにアクセスする方法として、以下のいずれかを選択しました。

- Web からヘルプにアクセスする。
- ヘルプをダウンロードし、そのコンテンツにローカル側でアクセスする。
- イントラネット上のサーバーからヘルプにアクセスする。

ヘルプ・コンテンツにアクセスする方法を変更するには、以下のステップを実行します。

1. 「ウィンドウ」 > 「設定」をクリックします。「設定」ウィンドウが開きます。
2. 「ヘルプ」項目を展開し、「目次」をクリックします。現在構成済みのインフォメーション・センター (単数または複数) のリストが表示されます。選択されているアクセス方式に応じて、以下のいずれかの手順を実行します。
  - IBM Web サイト上のインフォメーション・センターにあるヘルプ・コンテンツにアクセスする方法から、イントラネット・サーバー上のヘルプ・コンテンツにアクセスする方法に変更するには、以下のステップを実行します。
    - a. インターネット・サイトへのリンクを使用不可にするために、「目次」リスト内の Web アドレスを選択し、「使用不可」をクリックします。
    - b. 「新規」をクリックした後、イントラネット接続名を指定し、ヘルプ・コンテンツを保持するサーバーのイントラネット Web アドレスを指定してから、「OK」をクリックします。
    - c. 「OK」をクリックして、「設定」を閉じます。
    - d. 作業内容を保存し、製品をいったん終了してから再始動します。
    - e. 「ヘルプ」 > 「ヘルプ目次」をクリックして、ヘルプを開きます。
  - IBM Web サイト上のインフォメーション・センターにあるヘルプ・コンテンツにアクセスする方法から、ヘルプ・コンテンツをダウンロードしてローカル側でアクセスする方法に変更するには、以下のステップを実行します。



- a. コンテンツのリストで製品のリモートのインフォメーション・センターへの接続を選択した後、「**使用不可**」をクリックしてそのリンクを使用不可にします。
  - b. コンテンツのリストで「ローカル」(URL <http://127.0.0.1:63650/help>)を選択した後、「**使用可能にする**」をクリックして、ローカル・ホストを使用可能にします。
  - c. 「**OK**」をクリックして、「設定」を閉じます。
  - d. 作業内容を保存し、製品をいったん終了してから再始動します。
  - e. 製品を再始動すると、インターネットに接続していれば完全なオンライン・ヘルプがダウンロードされ、インストールされます。以後の始動時には、ヘルプに使用可能な更新がダウンロードされ、インストールされます。インターネットに接続できない場合は、ローカル・ヘルプ更新プログラムおよびクイック・スタート・ディスクの `install_localhelp` ディレクトリーにある `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用して、ヘルプ・コンテンツをインストールする必要があります。ローカル・ヘルプ更新プログラムと `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用して、ヘルプをローカル側にインストールする方法について詳しくは、23 ページの『ローカル・ヘルプ更新プログラムと `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用してヘルプ・コンテンツをローカル側にインストールする方法』を参照してください。
- ヘルプ・コンテンツにローカル側でアクセスする方法から、IBM Web サイトにあるヘルプ・コンテンツにアクセスする方法に変更するには、以下のステップを実行します。
    - a. コンテンツのリストでローカル・ホストへの接続を選択した後、「**使用不可**」をクリックしてそのリンクを使用不可にします。
    - b. 「**新規**」をクリックします。次に、接続の名前を指定し、ヘルプ・コンテンツが入っている IBM Web サイトの Web アドレス (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r0>) を指定してから、「**OK**」をクリックします。この Web アドレスは、すでに接続のリスト内で使用可能になっている場合もあります。リストにある場合は、その接続を選択し、「**使用可能**」をクリックします。
    - c. 「**OK**」をクリックして、「設定」を閉じます。
    - d. 作業内容を保存し、製品をいったん終了してから再始動します。
    - e. 「ヘルプ」 > 「ヘルプ目次」をクリックして、ヘルプを開きます。
  - ヘルプ・コンテンツにローカル側でアクセスする方法から、イントラネット・サーバーにあるヘルプ・コンテンツにアクセスする方法に変更するには、以下のステップを実行します。
    - a. コンテンツのリストでローカル・ホストへの接続を選択した後、「**使用不可**」をクリックしてそのリンクを使用不可にします。
    - b. 「**新規**」をクリックします。次に、接続の名前を指定し、ヘルプ・コンテンツを含んでいるサーバーのイントラネット Web アドレスを指定してから、「**OK**」をクリックします。
    - c. 「**OK**」をクリックして、「設定」を閉じます。
    - d. 作業内容を保存し、製品をいったん終了してから再始動します。
    - e. 「ヘルプ」 > 「ヘルプ目次」をクリックして、ヘルプを開きます。

- イン트라ネット・サーバーにあるヘルプ・コンテンツにアクセスする方法から、ヘルプ・コンテンツをローカル側にダウンロードしてアクセスする方法に変更するには、以下のステップを実行します。
  - a. イン트라ネット・サーバーへのリンクを使用不可にするために、「目次」リスト内でその接続を選択し、「**使用不可**」をクリックします。
  - b. 「ローカル」(URL <http://127.0.0.1:63650/help>) を選択した後、「**使用可能にする**」をクリックして、ローカル・ホストを使用可能にします。
  - c. 「**OK**」をクリックして、「設定」を閉じます。
  - d. 作業内容を保存し、製品をいったん終了してから再始動します。
  - e. 製品を再始動すると、インターネットに接続していれば完全なオンライン・ヘルプがダウンロードされ、インストールされます。

インターネットに接続できない場合は、ローカル・ヘルプ更新プログラムおよびクイック・スタート・ディスクの `install_localhelp` ディレクトリーにある `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用して、ヘルプ・コンテンツをインストールする必要があります。ローカル・ヘルプ更新プログラムと `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用して、ヘルプをローカル側にインストールする方法について詳しくは、23 ページの『ローカル・ヘルプ更新プログラムと `RDz8.0_updateSite.zip` ファイルを使用してヘルプ・コンテンツをローカル側にインストールする方法』を参照してください。

- イン트라ネット・サーバーにあるヘルプ・コンテンツにアクセスする方法から、IBM Web サイトにあるヘルプにアクセスする方法に変更するには、以下のステップを実行します。
  - a. イン트라ネット・サイトへのリンクを使用不可にするために、「目次」リスト内のイン트라ネット Web アドレスを選択し、「**使用不可**」をクリックします。
  - b. 「**追加**」をクリックします。次に、接続の名前を指定し、ヘルプ・コンテンツが入っている IBM Web サイトの Web アドレスを指定してから、「**OK**」をクリックします。
  - c. 「**OK**」をクリックして、「設定」を閉じます。
  - d. 作業内容を保存し、製品をいったん終了してから再始動します。
  - e. 「ヘルプ」 > 「ヘルプ目次」をクリックして、ヘルプを開きます。

**注:** 「ウィンドウ」 > 「設定」、「ヘルプ」 > 「コンテンツ」に進んでアクセス方式を変更する場合、その変更を反映するには、Rational Developer for System z を閉じてから再始動する必要があります。Rational Developer for System z を再始動しないと、ヘルプの動作が不安定で予測不能になる可能性があります。



---

## コンテキスト・ヘルプ



---

## 第 2 章 EXEC CICS、EXEC SQL、および EXEC DLI ステートメントの言語依存ヘルプの使用可能化

EXEC CICS、EXEC SQL、および EXEC DLI ステートメントの言語依存ヘルプを使用可能にするには、IMS™ および CICS インフォメーション・センターにアクセスする必要があります。

これらのインフォメーション・センターのオンライン・バージョンは、以下から利用できます。

CICS: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/cicsts/v4r2/index.jsp>

IMS: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dzichelp/v2r2/index.jsp>

IMS および CICS インフォメーション・センターは、ローカルにインストールしたり、イントラネット・サーバーにインストールしたりすることもできます。IMS インフォメーション・センターの取得、インストール、および初期化について詳しくは、32 ページの『Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールおよび初期化』を参照してください。

CICS インフォメーション・センターの取得、インストール、および初期化について詳しくは、33 ページの『CICS Transaction Server インフォメーション・センターのインストールおよび初期化』を参照してください。

Web 上の IMS および CICS インフォメーション・センターにアクセスするには、「ウィンドウ」>「設定」、「ヘルプ」>「EXEC ステートメント」を選択して、「インフォメーション・センターへのアクセス (Information Center Access)」フィールドで、「インターネット上 (On the Internet)」を選択します。これはデフォルトです。

ローカル・ワークステーションまたはイントラネット・サーバーに IMS および CICS インフォメーション・センターをインストールした後に、それらにアクセスするには、「ウィンドウ」>「設定」、「ヘルプ」>「EXEC ステートメント」を選択し、アクセス方式を選択して、必要に応じて「ホスト」および「ポート」番号を構成します。

Web 上の IMS および CICS インフォメーション・センターを Rational Developer for System z インフォメーション・センターの一部として組み込むには、「ウィンドウ」>「設定」、「ヘルプ」>「コンテンツ」を選択し、インフォメーション・センターの URL を「コンテンツ」リストに追加します。インフォメーション・センターの URL を「コンテンツ」リストに追加するには、次のようにします。

1. 「新規」をクリックします。
2. 「名前」フィールドに、インフォメーション・センターの名前を入力します。
3. 「URL」フィールドに、以下のいずれかの URL を入力します。

- CICS: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/cicsts/v4r2>

- IMS: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dzichelp/v2r2> 4

4. 「接続のテスト」をクリックします。
5. 「接続のテスト」が正常に完了したら、「OK」をクリックします。「接続のテスト」が失敗した場合は、入力した URL を確認して再試行します。
6. 「ヘルプ」>「EXEC ステートメント」を選択します。
7. 「インフォメーション・センターへのアクセス (Information Center Access)」フィールドで、「ヘルプ・コンテンツで使用可能にする (Enabled in Help Content)」を選択します。
8. 他の URL についても、ステップ 1 から 7 を繰り返します。

注: EXEC CICS、EXEC SQL、および EXEC DLI ステートメントの言語依存ヘルプは、Microsoft Windows でのみ使用可能です。

---

## Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールおよび初期化

Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターは、Microsoft Windows XP Professional システムにインストール可能なインフォメーション・センターとして使用できます。インストール可能なインフォメーション・センターは、ローカル・システム上またはイントラネット Windows サーバー上で実行できます。

Information Management for z/OS Solutions インフォメーション・センター DVD (SK5T-7377) は、IBM パブリケーション・センターから、低価格でご注文いただけます。インストール可能なインフォメーション・センターは英語版のみで、お客様の国または地域によってはご注文いただけない場合があります。Information Management for z/OS Solutions インフォメーション・センター DVD は、以下の方法でご注文ください。

1. IBM パブリケーション・センターの Web サイト: <http://www.ibm.com/e-business/linkweb/publications/servlet/pbi.wss> を参照してください。

注: Firefox を使用してこのサイトにアクセスする場合、既知の問題があります。回避策は異なるブラウザを使用することです。

2. ドロップダウンメニューから、国、地域、言語を選択し、「Go」をクリックしてください。
3. 次ページで「マニュアル検索」を選択します。
4. クイック・パブリケーション・センターの検索ページで、資料番号フィールドに SK5T-7377 を入力して、「Go」をクリックします。
5. ご注文を完了すると、Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センター DVD を受け取ります。

IMS インフォメーション・センター DVD を受け取ってインフォメーション・センターをインストールしたら、インフォメーション・センター内にある説明に従って最新の更新を入手します。

注: IMS インフォメーション・センターのインストール時に、最新の DB2® および IMS のトピックのみをインストールすることを選択できます。これらのトピックは、EXEC SQL および EXEC DLI ステートメントの言語依存ヘルプを使用可能にするのに必要なトピックです。

EXEC SQL および EXEC DLI ステートメントの言語依存ヘルプを使用可能にするには、インフォメーション・センターをダウンロードした場所に移動し、IC\_start.bat を実行してインフォメーション・センターを初期化します。このルーチンにより、インフォメーション・センターがポート 8801 (デフォルト) で初期化されます。ヘルプ情報が言語依存ヘルプで検索されるようにインフォメーション・センターは既知のポートを使用して初期化されなければなりません。ポート 8801 が使用できない場合は、IC\_start.bat バッチ・ファイルを編集してポート番号を変更し、ヘルプ設定内でポート番号を指定します。設定でポートを変更するには、「ウィンドウ」>「プリファレンス」、「ヘルプ」>「EXEC ステートメント」を開き、バッチ・ファイルで指定した新規のポート番号を入力します。

注: 「スタート」メニューのショートカットを使用して IMS インフォメーション・センターを初期化すると、ポート番号はランダムに割り当てられます。「スタート」メニューにあるショートカットを使用すると、言語依存ヘルプは適切な資料を見つけたり表示したりすることができません。

IMS インフォメーション・センターを開くには、IC\_start.bat を実行してインフォメーション・センターを初期化したあとに、ブラウザを使用して <http://127.0.0.1:8801/help/index.jsp> にリンクします。

注: IMS インフォメーション・センターを初期化するだけで、言語依存ヘルプを動作させることができます。インフォメーション・センターを開く必要はありません。

---

## CICS Transaction Server インフォメーション・センターのインストールおよび初期化

Windows 用 CICS Transaction Server インフォメーション・センターは、IBM® パブリケーション・センターで提供されています。このパッケージには、ワークステーションまたはサーバーでインフォメーション・センターを実行するのに必要な、すべての Eclipse コードおよび CICS 資料が含まれています。

Windows 用 CICS Transaction Server インフォメーション・センターをダウンロードするには、次のようにします。

1. IBM パブリケーション・センターの Web サイト: <http://www.ibm.com/e-business/linkweb/publications/servlet/pbi.wss> を参照してください。

注: Firefox を使用してこのサイトにアクセスする場合、既知の問題があります。回避策は異なるブラウザを使用することです。

2. ドロップダウンメニューから、国、地域、言語を選択し、「Go」をクリックしてください。
3. 次ページで「マニュアル検索」を選択します。
4. クイック・パブリケーション・センターの検索ページで、資料番号フィールドに SK4T-2666 を入力して、「Go」をクリックします。

5. インフォメーション・センター・パッケージをダウンロードします。
6. パッケージを解凍し、README ファイルの説明に従ってインフォメーション・センターをインストールします。

インフォメーション・センターをインストールしたら、インフォメーション・センター内にある説明に従って最新の更新を入手します。

EXEC CICS ステートメントの言語依存ヘルプを使用可能にするには、インフォメーション・センターをダウンロードした場所に移動し、IC\_start.bat を実行してインフォメーション・センターを初期化します。このルーチンにより、インフォメーション・センターがポート 9999 (デフォルト) で初期化されます。ヘルプ情報が言語依存ヘルプで検索されるようにインフォメーション・センターは既知のポートを使用して初期化されなければなりません。ポート 9999 が使用できない場合は、IC\_start.bat バッチ・ファイルを編集してポート番号を変更し、ヘルプ設定内で新しいポート番号を指定します。設定でポートを変更するには、「ウィンドウ」>「プリファレンス」、「ヘルプ」>「EXEC ステートメント」を開き、バッチ・ファイルで指定した新規のポート番号を入力します。CICS インフォメーション・センターを開くには、help\_cd\_start.bat を実行するか、IC\_start.bat を実行してインフォメーション・センターを初期化したあとに、ブラウザを使用して <http://127.0.0.1:9999/help/index.jsp> にリンクできます。

注: CICS インフォメーション・センターを初期化すれば、言語依存ヘルプが動作するようになります。インフォメーション・センターを開く必要はありません。

---

## 制限





---

### 第 3 章 制限: Rational Developer for System z Windows 7 クライアントで Rational Developer for System z の「ライセンス管理 (Manage Licenses)」パネルを使用していると、JavaIOException エラーが発生します

**問題:** Rational Developer for System z Windows 7 クライアントで Rational Developer for System z の「ライセンス管理 (Manage Licenses)」パネルを使用していると、Rational Developer for System z の中国語 (簡体字)、中国語 (繁体字)、日本語、スペイン語、フランス語のバージョンで JavaIOException が発生します。

**回避策:** Rational Developer for System z の中国語 (簡体字)、中国語 (繁体字)、日本語、スペイン語、フランス語のバージョンのライセンスを更新するために、Installation Manager プログラムのショートカットから Installation Manager を起動し、Installation Manager を使用してライセンスを更新します。



---

## 第 4 章 制限: push-to-client 更新は、「リモート・システム」ビューを使用して確立されたりリモート・システム接続でのみサポートされています

**問題:** push-to-client 更新は、「リモート・システム」ビューを使用して確立されたりリモート・システム接続でのみサポートされています。

**回避策:** push-to-client 用に構成されたりリモート・システムに接続するときに、SCLM パースペクティブではなく、「リモート・システム」ビューを使用して接続します。



---

## 第 5 章 制限: Rational Developer for System z v8.0.1 の push-to-client が Installation Manager v1.4.3 以降で機能しません

**問題:** Installation Manager v1.4.3 以降を使用している場合、Rational Developer for System z push-to-client フィーチャーを使用して Rational Developer for System z v8.0.1 から他のレベルに更新できません。

Installation Manager v1.4.3 で、ユーザーがソフトウェア・ライセンス条項および条件を受け入れることを示す方法が、ユーザー提供の Response.xml ファイル内の属性から、Installation Manager の呼び出し時に渡されるパラメーターに変更されました。

Rational Developer for System z v8.0.2 以降には、この変更内容を、Installation Manager の Developer for System z 呼び出しに同期させる更新が含まれています。Developer for System z v8.0.2 以降をインストールすると、Installation Manager v1.4.3 以降で、push-to-client フィーチャーを使用して以降の更新をインストールできます。

**注:** Installation Manager v1.4.2 を使用している場合は、push-to-client フィーチャーを使用して Rational Developer for System z を v8.0.2 以降に更新できます。

**回避策:** Installation Manager を、v1.4.2 からそれより新しいバージョンに更新する前に、Rational Developer for System z を v8.0.2 に更新します。すでに Installation Manager v1.4.3 以降に更新されている場合は、push-to-client フィーチャーを使用せずに、手動で Rational Developer for System z v8.0.2 以降をインストールします。



---

## 第 6 章 z/OS 統合開発環境

---

### **制限: z/OS V1R10 より前の JES3 リリースでは、アクティブ・ジョブの出力の取得機能がサポートされていません**

**問題:** アクティブ・ジョブの最新の出力を取得するためのアクティブ・ジョブ出力の取得機能が、z/OS V1R10 より前の JES3 リリースではサポートされていない。この制限は、以前のリリースの JES API の制限に起因します。

**回避策:** z/OS V1R10 以降の JES3 リリースを使用します。





---

## 第 7 章 Service Component Architecture

---

### 制限: Web サービス・バインディングの URI を編集してリソースを保存しても WSDL ファイルが更新されません

SCA コンポジットを CICS バンドルとしてデプロイした後、Web サービス・バインディングの URI を編集し、リソースを保存しても、プロモートされたサービスに使用される WSDL ファイルが更新されません。変更した URI を保存した後、コンポジットを再デプロイした場合、Web サービスは、変更されていない WSDL を使用して機能しなくなります。



---

## 第 8 章 BMS および MFS

---

**制限: Linux SUSE 10 上で開くと、BMS および MFS フィールドが「デザイン」ページに正しく表示されないことがあります**

回避策: BMS および MFS 「デザイン」ページの表示フォントを、GNU Unifont Mono に変更します。

1. 「ファイル」メニューから、「ウィンドウ」>「プロパティ」を選択します。
2. 左側のメニューから、BMS エディターまたは MFS エディターを展開して「デザイン・ページ」を選択します。
3. ドロップダウン・メニューから「GNU Unifont Mono」を選択します。

---

**制限: Linux システム上、またはネイティブ言語以外のシステム上で編集すると、UTF-8 以外の文字を使用した BMS マップで、ソースの構文解析エラーが表示される可能性があり、また、シンボリック・マップの生成時に構文解析エラーと字句エラーが発生する可能性があります**

回避策: コード・ページを更新して、BMS マップ内で使用されている現行の文字セットを反映します。

1. BMS マップを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
2. 左側のメニューから、「マッピング」を選択します。
3. 「ローカル・コード・ページ」では、「その他 (Other)」ラジオ・ボタンを選択し、ドロップダウンから特定のコード・ページを選択します。

---

**制限: 代替マップ名を変更または除去すると、BMS エディターのソース・ページ内の Developer for System z スタイルのコメントはプロパティを確実に更新しません**

回避策: 「マップ・プロパティ」ダイアログを使用して、BMS マップの代替マップ名を変更または除去します。

1. BMS マップを右クリックして、メニューから「マップ・プロパティ」を選択します。
2. オプションの左側のメニューから、「シンボリック・マップ」を選択します。
3. 「代替マップ名 (Alternate Map Name)」フィールドで変更を行います。

「代替回避策」: 保存し、閉じてから、BMS マップを再オープンします。このアクションにより、ソースの完全解析が行われます。

---

**制限: 代替構造開始レベルを変更または除去すると、BMS エディターのソース・ページ内の Developer for System z スタイルのコメントは BMS マップのプロパティを確実に更新しません**

回避策: 「マップ・プロパティ」ダイアログを使用して、BMS マップの代替構造開始レベルを変更または除去します。

1. 「デザイン・ページ」で、BMS マップを右クリックして、メニューから「マップ・プロパティ」を選択します。
2. オプションの左側のメニューから、「シンボリック・マップ」を選択します。
3. 「代替構造開始レベル (Alternate Structure Start Level)」フィールドで変更を行います。

「代替回避策」: 保存し、閉じてから、BMS マップを再オープンします。 このアクションにより、ソースの完全解析が行われます。

## 第 9 章 CICS

### 制限: 無視できるエラー・メッセージ

CICS コマンドに関連付けられたキーワードのいくつかは、長年に渡って変更されてきましたが、互換性の理由で保存されています。これらの廃止されたキーワードは、構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられることがあります。それらが表 1 にリストされており、それと共に問題の説明と、問題が発生した場合に取るべきアクションが示されています。

表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード

コマンド	説明	アクション
ALLOCATE	<p>このコマンドでは、NOSUSPEND キーワードが NOQUEUE キーワードの代わりです。</p> <p>NOSUSPEND を指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'NOSUSPEND'</p>	構文が正しいため、このエラーは無視できます。
ASSIGN	<p>互換性の理由で、OPSECURITY および OPERKEYS キーワードがサポートされています。</p> <p>これらのキーワードのいずれかを指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'OPSECURITY'Invalid command option 'OPERKEYS'</p>	構文が正しいため、これらのエラーは無視できます。
CSD GETNEXTRSRCE	<p>RESTYPE キーワードではなく、リソース名 (例: PROGRAM) を使用する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'PROGRAM'.</p>	構文が正しいため、このエラーは無視できます。
DELETE	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>

表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード (続き)

コマンド	説明	アクション
DELETEQ TS	<p>このコマンドでは、キーワード TS はオプションです。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>TS オプションを指定しない場合、構文チェッカーはコマンドが DELETEQ TD であると想定し、以下を戻します。 Command is ambiguous, 'TD' has been assumed</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p> <p>ただし、無効というフラグが立てられているその他のオプションを調べる場合、その他のエラーがないことを調べるために、TS を指定する必要があります。</p>
DEQ	<p>互換性の理由で、LUW の CVDA 値が UOW の代わりとしてサポートされます。</p> <p>LUW を指定する場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'LUW</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p>
DOCUMENT RETRIEVE	<p>このコマンドでは、CLNTCODEPAGE キーワードが CHARACTERSET キーワードの代わりです。</p> <p>CLNTCODEPAGE を指定する場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'CLNTCODEPAGE'</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p>
ENDBR	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>

表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード (続き)

コマンド	説明	アクション
ENQ	<p>互換性の理由で、LUW の CVDA 値が UOW の代わりとしてサポートされます。</p> <p>LUW を指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'LUW'</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p>
INQUIRE DSNAME	<p>このコマンドでは、BKOUTSTATUS オプションは廃止されましたが、前のリリースとの互換性の目的で保存されています。</p> <p>BKOUTSTATUS を指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'BKOUTSTATUS'</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p> <p>ただし、CICS はこのキーワードを受理し、通知メッセージを出します。</p>
INQUIRE JOURNALNUM	<p>このコマンドは廃止されており、互換性のみの理由で保存されています。</p> <p>このコマンドを指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'JOURNALNUM'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>構文が正しいため、これらのエラーは無視できます。</p> <p>ただし、CICS はこのコマンドを受理し、通知メッセージを出します。</p>
INQUIRE NETNAME	<p>このコマンドでは、SCREENWIDTH および SCREENHEIGHT キーワードは SCRNHT および SCRWD に置き換えられましたが、互換性の理由でサポートされます。</p> <p>これらのキーワードのいずれかを指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'SCREENWIDTH'Invalid command option 'SCREENHEIGHT'</p>	<p>構文が正しいため、これらのエラーは無視できます。</p>
INQUIRE PROGRAM	<p>このコマンドでは、JVMDEBUG オプションは廃止されましたが、前のリリースとの互換性の目的で保存されています。</p> <p>JVMDEBUG を指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'JVMDEBUG'</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p> <p>CICS は NODEBUG を CVDA 値として返します。</p>

表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード (続き)

コマンド	説明	アクション
INQUIRE TASK	<p>このコマンドでは、DTB オプションは廃止されており、INDOUBT に置き換えられました。ただし、前のリリースとの互換性の目的で保存されています。</p> <p>DTB を指定する場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'DTB'</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p> <p>CICS は NOTSUPPORTED を CVDA 値として戻します。</p>
INQUIRE TERMINAL	<p>このコマンドでは、SCREENWIDTH および SCREENHEIGHT キーワードは SCRNTHT および SCRNTWD に置き換えられましたが、互換性の理由でサポートされます。</p> <p>これらのキーワードのいずれかを指定する場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'SCREENWIDTH'Invalid command option 'SCREENHEIGHT'</p>	<p>構文が正しいため、これらのエラーは無視できます。</p>
INQUIRE VOLUME	<p>このコマンドは廃止されており、互換性のみの理由で保存されています。</p> <p>このコマンドを指定する場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'VOLUME'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>構文が正しいため、これらのエラーは無視できます。</p> <p>ただし、CICS はこのコマンドを受理し、通知メッセージを出します。</p>
READ	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>



表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード (続き)

コマンド	説明	アクション
READNEXT	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>
READPREV	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>
READQ TS	<p>このコマンドでは、キーワード TS はオプションです。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>TS オプションを指定しない場合、構文チェッカーはコマンドが READQ TD であると想定し、以下を返します。 Command is ambiguous, 'TD' has been assumed</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p> <p>ただし、無効というフラグが立てられているその他のオプションを調べる場合、その他のエラーがないことを調べるために、TS を指定する必要があります。</p>

表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード (続き)

コマンド	説明	アクション
RESETBR	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>
REWRITE	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>
SET DSNAME	<p>このコマンドでは、FAILEDDBKOUT、NORMALBKOUT、および BKOUTSTATUS オプションは廃止されましたが、前のリリースとの互換性の目的で保存されています。</p> <p>これらのキーワードのいずれかを指定する場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'FAILEDDBKOUT'Invalid command option 'NORMALBKOUT'Invalid command option 'BKOUTSTATUS'</p>	<p>構文が正しいため、これらのエラーは無視できます。</p> <p>ただし、CICS はこのキーワードを受理し、通知メッセージを出します。</p>

表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード (続き)

コマンド	説明	アクション
SET JOURNALNUM	<p>このコマンドは廃止されており、互換性のみの理由で保存されています。</p> <p>このコマンドを指定する場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'JOURNALNUM'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>構文が正しいため、これらのエラーは無視できます。</p> <p>ただし、CICS はこのコマンドを受理し、通知メッセージを出します。</p>
SET VOLUME	<p>このコマンドは廃止されており、互換性のみの理由で保存されています。</p> <p>このコマンドを指定する場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'VOLUME'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>構文が正しいため、これらのエラーは無視できます。</p> <p>ただし、CICS はこのコマンドを受理し、通知メッセージを出します。</p>
STARTBR	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>
UNLOCK	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を戻します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>

表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード (続き)

コマンド	説明	アクション
WEB READ	<p>このコマンドでは、CLNTCODEPAGE キーワードが CHARACTERSET キーワードの代わりです。</p> <p>CLNTCODEPAGE を指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'CLNTCODEPAGE'</p>	構文が正しいため、このエラーは無視できます。
WEB RECEIVE	<p>このコマンドでは、CLNTCODEPAGE キーワードが CHARACTERSET キーワードの代わりです。</p> <p>CLNTCODEPAGE を指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'CLNTCODEPAGE'</p>	構文が正しいため、このエラーは無視できます。
WEB SEND	<p>このコマンドでは、CLNTCODEPAGE キーワードが CHARACTERSET キーワードの代わりです。</p> <p>CLNTCODEPAGE を指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'CLNTCODEPAGE'</p>	構文が正しいため、このエラーは無視できます。
WEB STARTBROWSE	<p>このコマンドでは、CLNTCODEPAGE キーワードが CHARACTERSET キーワードの代わりです。</p> <p>CLNTCODEPAGE を指定する場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'CLNTCODEPAGE'</p>	構文が正しいため、このエラーは無視できます。
WRITE	<p>このコマンドでは、キーワード DATASET を FILE の代わりとして使用できます。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>これを行う場合、構文チェッカーは以下を返します。 Invalid command option 'DATASET'</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>DATASET は FILE の代わりとして受諾されているため、このエラーは無視できます。</p> <p>この問題が原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられる場合、その他のエラーがないことを調べるために、DATASET を FILE に変更することができます。</p>

表 2. 構文チェッカーによって誤って無効というフラグが立てられるキーワード (続き)

コマンド	説明	アクション
WRITEQ TS	<p>このコマンドでは、キーワード TS はオプションです。(これは、以前のリリースとの互換性を目的としており、文書化されません。)</p> <p>TS オプションを指定しない場合、構文チェッカーはコマンドが WRITEQ TD であると想定し、以下を戻します。 Command is ambiguous, 'TD' has been assumed</p> <p>これが原因で、その他のオプションに無効というフラグが立てられることがあります。</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p> <p>ただし、無効というフラグが立てられているその他のオプションを調べる場合、その他のエラーがないことを調べるために、TS を指定する必要があります。</p>
WEB ENDBROWSE	<p>HTTPHEADER キーワードを使用する場合、SESSTOKEN キーワードはオプションですが、これを省略すると、構文検査で以下が戻されます。 Command requires the option '&lt;Expression&gt;'</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p>
WEB READ	<p>HTTPHEADER キーワードを使用する場合、SESSTOKEN キーワードはオプションですが、これを省略すると、構文検査で以下が戻されます。 Command requires the option '&lt;Expression&gt;'</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p>
WEB STARTBROWSE	<p>HTTPHEADER キーワードを使用する場合、SESSTOKEN キーワードはオプションですが、これを省略すると、構文検査で以下が戻されます。 Command requires the option '&lt;Expression&gt;'</p>	<p>構文が正しいため、このエラーは無視できます。</p>

## 制限: メッセージが生成されないエラー

コーディング・エラーによっては、構文チェッカーがメッセージを表示しないことがあります。これらのエラーが表 1 にリストされています。プログラムにこれらのエラーのいずれかが含まれている場合、構文チェッカーによってフラグは立てられませんが、CICS 変換プログラムを使用してプログラムを変換するときにフラグが立てられます。

表 3. 構文チェッカーがメッセージを表示しないエラー

コマンド	エラー
ブラウズをサポートする All INQUIRE および FEPI INQUIRE コマンド	START、AT、または END キーワードを使用して、ブラウズを開始または終了する場合、その他のキーワードは使用できません。  START、AT、または END キーワードを使用して、ブラウズを開始または終了する場合、リソース名は指定できません。
ALLOCATE	PARTNER キーワードと PROFILE キーワードを一緒に使用できません。
COLLECT STATISTICS	NODE キーワードを指定する場合、TARGET キーワードも指定する必要があります。
CONNECT PROCESS	SESSION か PARTNER のいずれかを指定する必要があります。  PARTNER キーワードを指定する場合、CONVID キーワードも指定する必要があります。
CONVERSE	ATTACHID キーワードは、CTLCHAR、DEST、ERASE、DEFAULT、ALTERNATE、LDC、LINEADDR、PSEUDOBIN、または STRFIELD キーワードと共に使用できません。  FMH キーワードと LDC キーワードを一緒に使用できません。  SET キーワードを指定する場合、TOLENGTH または TOFLENGTH キーワードも指定する必要があります。
CSD DELETE	1 つのリソース・タイプ・キーワードのみを指定する必要があります。
CSD GETNEXTGROUP	GROUP キーワードを指定する必要があります。
CSD GETNEXTLIST	LIST キーワードを指定する必要があります。
CSD GETNEXTRSRCE	RESTYPE、RESID、および GROUP キーワードを指定する必要があります。
CSD INQUIREGROUP	GROUP キーワードを指定する必要があります。
CSD INQUIRELIST	LIST キーワードを指定する必要があります。
CSD INQUIRERSRCE	1 つのリソース名キーワードのみを指定する必要があります。
DEFINE TIMER	AT キーワードと DAYS キーワードは共に使用できません。  AFTER キーワードは、ON、YEAR、MONTH、DAYOFMONTH、または DAYOFYEAR キーワードと共に使用できません。

表 3. 構文チェッカーがメッセージを表示しないエラー (続き)

コマンド	エラー
DELETE CONTAINER	CHANNEL キーワードは、ACTIVITY、ACQACTIVITY、PROCESS、または ACQPROCESS キーワードと共に使用できません。
DELETE FILE	RBA、XRBA、または RRN キーワードは、KEYLENGTH、GENERIC、または NUMREC キーワードと共に使用できません。
DISABLE PROGRAM	EXIT キーワードは、FORMATEDF、PURGEABLE、SHUTDOWN、SPI、または TASKSTART キーワードと共に使用できません。
ENABLE PROGRAM	EXIT キーワードは、FORMATEDF、INDOUBTWAIT、LINKEDITMODE、OPENAPI、PURGEABLE、QUASIRENT、SHUTDOWN、SPI、TALENGTH、TASKSTART、または THREADSAFE キーワードと共に使用できません。
EXTRACT ATTACH	SESSION または CONVID キーワードは、ATTACHID キーワードと共に使用できません。
EXTRACT WEB	SESSTOKEN キーワードは REQUESTTYPE キーワードと共に使用できません。
EXTRACT TCPIP	このコマンドの構文チェッカーによって返されるエラーはありません。
EXTRACT WEB	<p>CICS の EXTRACT WEB を HTTP サーバーとして使用する場合、SESSTOKEN キーワードを指定しないでください。</p> <p>CICS の EXTRACT WEB を HTTP クライアントとして使用する場合、SESSTOKEN キーワードを指定する必要があります。</p> <p>HOST、HTTPVERSION、PATH、PORTNUMBER、REALM、または QUERYSTRING キーワードを指定する場合、それらに対応する長さのキーワードを指定する必要があります。</p>
FEPI CONVERSE DATASTREAM	<p>CHAIN または RU キーワードは、POOL キーワードと共に使用できません。</p> <p>POOL キーワードは、UNTILCDEB キーワードも使用する場合に限り使用できます。</p>
FEPI CONVERSE FORMATTED	AID または FROMCURSOR キーワードは、POOL キーワードと共に使用できません。
FEPI INQUIRE CONNECTION	START または END キーワードを使用してすべての FEPI 接続のブラウズを開始または終了する場合、NODE および TARGET 以外のその他のキーワードは使用できません。

表 3. 構文チェッカーがメッセージを表示しないエラー (続き)

コマンド	エラー
FORMATTIME	TIME キーワードを指定せずに、TIMESEP キーワードを使用することはできません。
GET CONTAINER	INTOCCSID、INTOCODEPAGE、CONVERTST、および CCSID キーワードは、ACTIVITY、ACQACTIVITY、PROCESS、または ACQPROCESS キーワードと共に使用できません。
INQUIRE ASSOCIATION LIST	INQUIRE ASSOCIATION LIST オプションは、INQUIRE ASSOCIATION オプションと共に使用できません。  LISTSIZE キーワードを指定する必要があります。
INQUIRE CORBASERVER	NUMCIPHERS キーワードを指定する場合、CIPHERS キーワードも指定する必要があります。
INQUIRE MODENAME	NEXT キーワードを使用する場合は、CONNECTION キーワードも使用する必要があります。
INQUIRE MONITOR	FREQUENCYHRS、FREQUENCYMIN、および FREQUENCYSEC のいずれかを使用する場合、これらをすべて指定する必要があります。  FREQUENCY キーワードは、FREQUENCYHRS、FREQUENCYMIN、または FREQUENCYSEC キーワードと共に使用できません。
INQUIRE TASK	INQUIRE TASK LIST オプションは、INQUIRE TASK オプションと共に使用できません。
INQUIRE TCPIPService	NUMCIPHERS キーワードを指定する場合、CIPHERS キーワードも指定する必要があります。
INQUIRE URIMAP	NUMCIPHERS キーワードを指定する場合、CIPHERS キーワードも指定する必要があります。
INQUIRE VTAM®	PSDINTHRS、PSDINTMIN、および PSDINTSEC のいずれかを使用する場合、これらをすべて指定する必要があります。  PSDINT キーワードは、PSDINTHRS、PSDINTMIN、または PSDINTSEC キーワードと共に使用できません。
INVOKE SERVICE	SCOPE キーワードを指定せずに、SCOPELEN キーワードを使用することはできません。
MOVE CONTAINER	CHANNEL キーワードは、TOPPROCESS または TOACTIVITY キーワードと共に使用できません。  TOCHANNEL キーワードは、FROMPROCESS または FROMACTIVITY キーワードと共に使用できません。



表 3. 構文チェッカーがメッセージを表示しないエラー (続き)

コマンド	エラー
PERFORM JVMPOOL	START または INITIALIZE キーワードを使用する場合、JVMPROFILE と JVMCOUNT に加えて、EXECKEY、CICSEXECKEY、および USEREXECKEY のいずれか 1 つのキーワードも使用する必要があります。
PUT CONTAINER	FROMCCSID または DATATYPE キーワードは、ACTIVITY、ACQACTIVITY、PROCESS、または ACQPROCESS キーワードと共に使用できません。
READ	KEYLENGTH キーワードは、RBA、XRBA、または RRN キーワードと共に使用できません。  GENERIC または GTEQ キーワードは、RBA、XRBA、DEBREC、または DEBKEY キーワードと共に使用できません。  RBA、XRBA、DEBREC、または DEBKEY キーワードを使用する場合は、EQUAL キーワードを使用する必要があります。  RRN キーワードは、GENERIC キーワードと共に使用できません。
READNEXT	KEYLENGTH キーワードは、RBA、RRN、または XRBA キーワードと共に使用できません。  TOKEN キーワードを使用する場合は、UPDATE キーワードを使用する必要があります。
READPREV	KEYLENGTH キーワードは、RBA、RRN、または XRBA キーワードと共に使用できません。  TOKEN キーワードを使用する場合は、UPDATE キーワードを使用する必要があります。
READQ TS	SET キーワードを使用する場合は、LENGTH キーワードも使用する必要があります。
RECEIVE	SET キーワードを使用する場合は、LENGTH または FLENGTH キーワードも使用する必要があります。
RESETBR	KEYLENGTH キーワードは、RBA、XRBA、または RRN キーワードと共に使用できません。  GENERIC キーワードは、RBA、XRBA、または RRN キーワードと共に使用できません。  RBA または XRBA キーワードを使用する場合は、EQUAL キーワードを使用する必要があります。  RBA または XRBA キーワードは、GTEQ キーワードと共に使用できません。

表 3. 構文チェッカーがメッセージを表示しないエラー (続き)

コマンド	エラー
RETURN	<p>その他のキーワードは、ENDACTIVITY キーワードと共に使用できません。</p> <p>CHANNEL キーワードは、COMMAREA または LENGTH キーワードと共に使用できません。</p>
SEND	<p>ATTACHID キーワードは、CBUFF、CNOTCOMPL、CTLCHAR、DEST、ERASE、DEFAULT、ALTERNATE、LDC、LEAVEKB、LINEADDR、PASSBK、PSEUDOBIN、または STRFIELD キーワードと共に使用できません。</p> <p>CNOTCOMPL キーワードは、CONFIRM または INVITE キーワードと共に使用できません。</p> <p>ERASE、DEFAULT、または ALTERNATE キーワードは、STRFIELD キーワードと共に使用できません。</p> <p>LAST キーワードは、PASSBK または CBUFF キーワードと共に使用できません。</p> <p>LDC キーワードは、FMH キーワードと共に使用できません。</p> <p>PASSBK または CBUFF が使用されている場合は待つ必要があります。</p>
SEND MAP	<p>MAPPINGDEV キーワードは、NLEOM、MSR、FMHPARM、LDC、OUTPARTN、ACTPARTN、ACCUM、REQID、または NOFLUSH キーワードと共に使用できません。</p>
SET CONNECTION	<p>ACQUIRED キーワードは、OUTSERVICE キーワードと共に使用できません。</p>
SET JOURNALNAME	<p>STATUS、ENABLED、または DISABLED キーワードは、ACTION、FLUSH、または RESET キーワードと共に使用できません。</p>
SET MONITOR	<p>FREQUENCYHRS、FREQUENCYMIN、FREQUENCYSEC キーワード (一緒にまたは個別に使用可能) の全部ではなく、一部を使用した場合、構文エラーが報告されない場合があります。</p>
SET TRANSACTION	<p>RUNAWAY キーワードは、SYSTEM キーワードと共に使用できません。</p>
SIGNAL EVENT	<p>FROM キーワードは、FROMCHANNEL キーワードと共に使用できません。</p>

表 3. 構文チェッカーがメッセージを表示しないエラー (続き)

コマンド	エラー
STARTBR	<p>KEYLENGTH キーワードは、RBA、XRBA、または RRN キーワードと共に使用できません。</p> <p>GENERIC または GTEQ キーワードは、RBA、XRBA、DEBREC、または DEBKEY キーワードと共に使用できません。</p> <p>RBA、XRBA、DEBREC、または DEBKEY キーワードを使用する場合は、EQUAL キーワードを使用する必要があります。</p> <p>RRN キーワードは、GENERIC キーワードと共に使用できません。</p>
TRANSFORM DATATOXML	<p>ELEMNAMELEN、ELEMNSLEN、TYPENAMELEN、および TYPENSLEN キーワードのいずれかを使用する場合は、対応する ELEMNAME、ELEMNS、TYPENAME、および TYPENS キーワードを使用する必要があります。このタイプのエラーが複数検出されることはありません。このタイプのエラーが複数存在する場合、後続のエラーは検出されません。</p>
TRANSFORM XMLTODATA	<p>ELEMNAMELEN、ELEMNSLEN、TYPENAMELEN、および TYPENSLEN キーワードのいずれかを使用する場合は、対応する ELEMNAME、ELEMNS、TYPENAME、および TYPENS キーワードを使用する必要があります。このタイプのエラーが複数検出されることはありません。このタイプのエラーが複数存在する場合、後続のエラーは検出されません。</p>
WEB EXTRACT	<p>CICS の EXTRACT WEB を HTTP サーバーとして使用する場合、SESSTOKEN キーワードを指定しないでください。</p> <p>CICS の EXTRACT WEB を HTTP クライアントとして使用する場合、SESSTOKEN キーワードを指定する必要があります。</p> <p>SESSTOKEN キーワードは REQUESTTYPE キーワードと共に使用できません。</p> <p>HOST、HTTPVERSION、PATH、PORTNUMBER、REALM、または QUERYSTRING キーワードを指定する場合、それらに対応する長さのキーワードを指定する必要があります。</p>
WEB EXTRACT	<p>SESSTOKEN キーワードは REQUESTTYPE キーワードと共に使用できません。</p>
WEB OPEN	<p>HOST キーワードを指定する必要がある場合、HOSTLENGTH および PORTNUMBER キーワードを指定する必要があります。</p> <p>CIPHERS キーワードを指定する必要がある場合、NUMCIPHERS キーワードを指定する必要があります。</p> <p>HTTPVNUM キーワードを指定する必要がある場合、HTTPRNUM キーワードを指定する必要があります。</p>

表 3. 構文チェッカーがメッセージを表示しないエラー (続き)

コマンド	エラー
WEB PARSE	URL キーワードを指定する必要があります。
WEB READ	<p>HTTPHEADER キーワードを使用する場合は、NAMELENGTH、VALUE、および VALUELENGTH キーワードも使用する必要があります。</p> <p>オプションで、SESSTOKEN キーワードを使用することもできます。HTTPHEADER と共に、これ以外のキーワードを使用しないでください。</p>
WEB RECEIVE	<p>SESSTOKEN、MEDIATYPE、STATUSCODE、STATUSTEXT、STATUSLEN、CLIENTCONV、CLICONVERT、または NOCLICONVERT キーワードは、TYPE、CLNTCODEPAGE、または HOSTCODEPAGE キーワードと共に使用できません。</p> <p>CLIENTCONV、CLICONVERT、または NOCLICONVERT キーワードを使用する場合、SESSTOKEN キーワードも使用する必要があります。</p> <p>SESSTOKEN キーワードは、SERVERCONV、SRVCONVERT、または NOSRVCONVERT キーワードと共に使用できません。</p>
WEB SEND	<p>SESSTOKEN キーワードは、CLNTCODEPAGE、HOSTCODEPAGE、STATUSCODE、STATUSTEXT、STATUSLEN、LENGTH、SERVERCONV、SRVCONVERT、または NOSRVCONVERT キーワードと共に使用できません。</p> <p>CLIENTCONV、CLICONVERT、または NOCLICONVERT キーワードを使用する場合、SESSTOKEN キーワードも使用する必要があります。</p>
WEB STARTBROWSE	<p>HTTPHEADER キーワードを使用する場合は、オプションで、SESSTOKEN キーワードも使用することができます。</p> <p>HTTPHEADER と共に、これ以外のキーワードを使用しないでください。</p>
WRITE	RBA、XRBA、または RRN キーワードは、KEYLENGTH キーワードと共に使用できません。
WSACONTEXT BUILD	<p>ACTION、MESSAGEID、RELATESURI、または ERTYPE キーワードを 1 つ以上使用する必要があります。</p> <p>RELATESTYPE キーワードを使用する場合は、RELATESURI キーワードを指定する必要があります。</p> <p>EPRTYPE、EPRFIELD、EPRFORM、および EPRLENGTH キーワードをすべて指定するか、またはこれらを全部指定しないかのいずれかを行う必要があります。</p>

表 3. 構文チェッカーがメッセージを表示しないエラー (続き)

コマンド	エラー
WSACONTEXT GET	<p>CONTEXTTYPE、REQCONTEXT、または RESPCONTEXT キーワードの 1 つを使用する必要があります。</p> <p>ACTION、MESSAGEID、RELATESURI、または ERTYPE キーワードを 1 つ以上使用する必要があります。</p> <p>EPRTYPE、EPRFIELD、(EPRINTO または EPRSET)、および EPRLENGTH キーワードをすべて指定するか、またはこれらを全部指定しないかのいずれかを行う必要があります。</p>
WSAEPR CREATE	<p>ADDRESS、METADATA、または REFPARMS キーワードの 1 つを使用する必要があります。</p> <p>METADATALLEN を指定する場合は、METADATA を指定する必要があります。</p>
XCTL	<p>CHANNEL キーワードは、COMMAREA または LENGTH キーワードと共に使用できません。</p>

---

## 制限: 「CICS バンドルのデプロイ」ウィザードを使用して CICS バンドルをデプロイすると、Java で NullPointerException が発生したことを報告する詳細情報を伴ってエラーが発生する可能性があります

**問題:** 「CICS バンドルのデプロイ」ウィザードを使用して CICS バンドルをデプロイすると、Java で NullPointerException が発生したことを報告する詳細情報を伴ってエラーが発生する可能性があります。クライアントと CICS ターゲット領域との間の通信が遅い場合に、このエラーが発生する可能性があります。

ターゲット領域の接続について問い合わせる要求、およびデフォルト・バンドル属性について問い合わせる要求に対し、応答は順序に関係なく処理されます。

**回避策:** 2 回目にバンドルを再デプロイしようとする、通常は正常に処理されます。



---

## 第 10 章 File Manager Integration

---

### File Manager Integration でフォーマット済みデータ・エディター内の一部のビューが名前変更されました

File Manager Integration で、フォーマット済みデータ・エディター内の一部のビューが名前変更されました。

以下のビューは、名前が異なっても同じものです。

- 定様式ページ/定様式モード
- 文字ページ/文字モード
- テーブル・フォーマット/テーブル・モード
- 単一フォーマット/単一モード
- 16 進フォーマット/16 進モード

---

### 制限: 基準作成ビルダーで作成した特定の複雑な基準がサポートされません

**問題:** 基準作成ビルダーで作成した特定の複雑な基準が File Manager によってサポートされない。これらの基準は、基準作成ビルダーの終了時に「FMNBB310 括弧が対になっていません (FMNBB310 Unbalanced parenthesis)」のエラーを報告します。

**回避策:** 基準を編成し直して、よりネストが少ない「AND」および「OR」のブランチを設けます。

---

### 制限: データ・セットを保存したときにデータが失われ、RSE 接続が失われます

**問題:** FMI フォーマット済みデータ・エディターでデータ・セットを編集時に、ホストとの RSE 接続が失われた場合、編集セッションで前回の保存以降にデータ・セットに加えた変更がすべて失われる。

**回避策:** 変更を頻繁に保存しておきます。

---

### 制限: REPLACING 文節を伴う COPY コマンドが入っている COBOL コピーブックでのテンプレートの作成

COBOL コピーブックからテンプレートを作成する場合、File Manager では、テンプレート作成プロセスの 1 ステップとして、コピーブックをコンパイルする必要があります。使用する COBOL コピーブックに REPLACING 文節を伴う COPY コマンドがある場合は、テンプレートの作成を試みたときに、コンパイルの失敗が表示されることがあります。

このコンパイルの失敗の原因は、ほとんどの場合、File Manager が COPY ステートメントを使用して、COBOL コピーブックを単純な COBOL プログラムに挿入したことにあります。コピーブック内の REPLACING 文節を伴う COPY コマンドは、

別の COPY ステートメント内にネストされます。REPLACING 文節を伴うネストされた COPY コマンドは、COBOL 内では正しくないため、結果としてコンパイル・エラーになります。ただし、拡張コピーブック選択で範囲を指定した場合、選択したコピーブックの部分は単純な COBOL プログラム内にインラインでコピーされ、COPY ステートメントを使用した挿入は行われません。したがって、REPLACING 文節を伴う COPY コマンドはネストされず、コンパイルは正常に完了します。

REPLACING 文節を伴う COPY コマンドが入っている COBOL コピーブックで、テンプレートを正常に作成するには、以下のようにします。

1. 必ず、コピーブックと、ネストされたコピーブックを同じ PDS 内に配置します。
2. 「テンプレートの作成」ウィザードで、「拡張コピーブック・テンプレート」を選択します。
3. コピーブック選択を編集して、範囲を指定します (1 の「開始ステートメント」を指定し、「終了ステートメント」をブランクのままにすると、コピーブックの内容全体が選択されます)。



---

## 第 11 章 COBOL のコード・レビュー

---

**制限:** COBOL のコード・レビューは、エディター・セッションで開かれている場合に限り、リモート COBOL ファイルに対して実行することができません

エディターのコンテキスト・メニューから「ソフトウェア・アナライザー (Software Analyzer)」を選択し、次に適切な分析構成を選択します。「ソフトウェア・アナライザー構成 (Software Analyzer Configuration)」ダイアログで「スコープ (Scope)」を指定するときに、個々のプロジェクトを選択して分析する場合は、ローカルの COBOL プロジェクトのみを選択します。

SCLMConfigProject、RemoteSystemsTempFiles、および wdz\_proj\_xxx (ここで、xxx は z/OS サブプロジェクト名です) などの RDz 内部プロジェクトに対して COBOL コード・レビューを実行すると、予期せぬ結果が発生します。

**回避策:** ご使用の z/OS PDS またはメンバーを、ローカル・プロジェクトにコピーします。

1. ローカル・プロジェクトを作成します (「ファイル」->「新規」->「ワークステーション」->「COBOL」->「ローカル・プロジェクト」)。
2. ご使用の z/OS PDS またはメンバーを新規プロジェクトに追加 (またはドラッグ・アンド・ドロップ) します。
3. ローカル・プロジェクトに対し、COBOL コード・レビューを実行します。

---

**制限:** 「ソフトウェア・アナライザー構成 (Software Analyzer Configuration)」ダイアログの「規則 (Rules)」タブで、COBOL ルール・セットのコンテキスト・ヘルプは現在使用できません

**回避策:** Rational Developer for System z インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r0/index.jsp>) の [http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r0/index.jsp?topic=/com.ibm.rsar.analysis.codereview.cobol.doc/topics/cac\\_main\\_g.html](http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r0/index.jsp?topic=/com.ibm.rsar.analysis.codereview.cobol.doc/topics/cac_main_g.html) を参照してください。

---

**制限:** 「ソフトウェア・アナライザー設定のカスタム規則およびカテゴリー (Software Analyzer Preferences Custom Rules and Categories)」ページのインポート機能は、定義済みの既存のカテゴリーおよび規則がない場合にのみ、最初に使用します

以降のインポートで、予期せぬ結果が発生します。

**回避策:** ありません



---

## 第 12 章 COBOL 言語サポート

---

**制限: COBOL エディターでコンテンツ・アシストを使用すると、IF ステートメントまたはその変化形が、SQL ステートメントの直後のコンテンツ・アシストに表示されません**

**問題:** COBOL エディターでコンテンツ・アシストを使用すると、IF ステートメントまたはその変化形が、SQL ステートメントの直後のコンテンツ・アシストに表示されません。

COBOL で、END-EXEC に続く文の終了ピリオドは、多くの場合、プログラム構造によってはオプションです。文の終了ピリオドが含まれていない場合は、IF ステートメントまたはその変化形は表示されません。

**回避策:** COBOL で、END-EXEC に続く文の終了ピリオドを追加します。

**注:** IF ステートメントは、DATA DIVISION / WORKING-STORAGE SECTION においては無効です。したがって、その領域にカーソルを置いても、コンテンツ・アシストによって IF が提案されることはありません。



---

## 第 13 章 PL/I 言語サポート

---

### 制限: System z LPEX エディターまたは PL/I エディターを使用する場合、構文検査でエラーが誤って識別されます

PL/I 拡張編集機能は、リアルタイムの構文検査からなっています。正しい PL/I 構文の一部にエラーのマークが付いたり、正しくない PL/I 構文の一部にエラーのマークが付かなかったりする場合があります。

以下の正しい PL/I 構文にはエラーのマークが付きます。

- マクロ・プリプロセッサ出力が正しい PL/I である場合の、マクロ・プリプロセッサ入力内の正しくない PL/I 構文
- プリプロセッサ・ディレクティブのラベル
- 入り口定数
- タイプ関数
- 汎用属性
- 構造を宣言するときの属性の因数処理
- 属性が定義されている isub オプション
- attach ステートメントの tstack 属性
- 暗黙的な変数宣言
- 一部の正しい表現にエラーのマークが付く

以下の正しくない PL/I 構文にエラーのマークが付きません。

- do ステートメントの条件接頭語
- declare、default、when、otherwise、および on ステートメントのラベル接頭部
- float または fixed のスケール係数
- 宣言ステートメントの重複属性
- マクロ・プリプロセッサ出力内の構文エラー

コンパイラ・オプションは無視されます。

---

### 制限: 「宣言を開く」や吹き出しヘルプのようなエディター・ツールは、名前が PL/I キーワードである PL/I 変数に対して機能しません

PL/I キーワードと同じ名前の PL/I 変数は、PL/I ツールによって、変数ではなくキーワードとして解釈されます。これは、PL/I エディターの「宣言を開く」、「吹き出し情報 (Hover Info)」、「構文の色の指定」、「フォーマット (Formatting)」機能、および System z LPEX エディターの「吹き出し情報 (Hover Info)」および「宣言を開く」機能に影響します。

回避策: PL/I キーワード名とは異なる変数名を使用します。



---

## 第 14 章 コンパイル済み言語デバッガー

---

**制限: アクティブなデバッグ・セッションがあるときに F5 キーを押すと、デバッガーは、更新アクションを実行するのではなく、ステップイントゥを実行します**

これは、デバッグ・セッションが開始されたときに開いていたすべてのパースペクティブにあてはまります。

デバッグ・パースペクティブ以外のパースペクティブでデバッグ・セッションを開始した場合、Rational Developer for System z は、そのパースペクティブに「デバッグ」ビューを追加することがあります。その後、デバッグのショートカットがすべてのビューに追加されます。場合によっては (F5 のように)、既存のショートカットがオーバーライドされます。

**回避策:** 「デバッグ・パースペクティブ」以外のパースペクティブで、以下の手順を実行します。

1. 「デバッグ」ビューが開いている場合は、それを閉じます。
2. 「ウィンドウ」->「パースペクティブのカスタマイズ」をクリックします。
3. 「パースペクティブのカスタマイズ」ウィンドウで、「コマンド」タブをクリックします。
4. 「使用可能なコマンド・グループ」で、「デバッグ」のチェック・マークを外します。
5. 「OK」をクリックします。

---

**制限: エディター内で、属性名にカーソルを合わせるときに表示される変数は、変更できません**

COBOL および PL/I のデバッグに使用される LPEX ベースのエディターでは、吹き出しに 1 レベルだけ展開された構造または配列が表示されますが、それ以上のレベルまで展開することはできません。

「変数およびモニター (Variables and Monitors)」ビューで追加レベルまで展開できます。





---

## 第 15 章 共通アクセス・リポジトリ・マネージャー (CARMA)



---

## 第 16 章 Application Deployment Manager

---

### 制限: Web サービス接続タイプを使用する CICS リソース定義サーバーは、新しい CICS リソース・タイプをサポートしません

Web サービス接続タイプを使用する CICS リソース定義サーバーは、バンドル、XML 変換、イベント・バインディングなどの新しい CICS TS v3.2 リソース・タイプをサポートしません。

### 制限: コードまたは CICS リソースを生成するダイアログにリストされるのは、CICS リソース定義サーバーをホストする領域 (接続領域) のみです

コードまたは EST や SCA などの CICS リソースを生成するダイアログにリストされるのは、CICS リソース定義サーバーをホストする領域 (接続領域) のみです。

これらの接続領域に接続される領域は、生成ダイアログにはリストされません。したがって、生成される成果物をデプロイできるのは、CICS リソース定義サーバーを稼働する領域のみです。CICS リソースは、アプリケーション・デプロイメント・マニフェスト・エディターを介して、マニフェストの編集時に別のターゲット領域を選択することで、他の領域において定義、インストール、およびそこから廃棄することができます。「ファイル」メニューおよび z/OS プロジェクトのポップアップ・メニューから使用できる新しい ADM マニフェスト・ダイアログは、CICS リソース定義サーバーと同じ領域に存在しない ADM マニフェストの作成をサポートします。

### 制限: CICS リソース定義 (CRD) サーバーへの既存接続のパスワードを変更できません

CICS リソース定義 (CRD) サーバーへの既存の接続のパスワードを変更するには、ユーザー ID を、存在しない ID に変更し、「適用」ボタンをクリックし、ユーザー ID を元に戻す変更をして、その後で「接続」ボタンをクリックすることが必要になる場合があります。このアクションによって、接続ダイアログは新規パスワードのプロンプトを出します。



---

## 第 17 章 Software Configuration Library Manager (SCLM) Developer Toolkit

---

### 制限: z/OS 1.8 では SCLM 検索および SCLM メンバー・セキュリティー がサポートされません

SCLM 検索および SCLM メンバー・セキュリティーは、ベース SCLM for z/OS 1.8 ではサポートされず、したがって、SCLM Developer Toolkit for z/OS 1.8 を通じて使用できません。

SCLM 検索サポートのためには、以下のいずれかのレベルをホストにインストールする必要があります。

プログラム番号	製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
5694-A01	z/OS v 1.10 以上	
5694-A01	z/OS v 1.9	APAR OA27379 - 適用可能なすべての PTF

SCLM メンバー・セキュリティーのサポートのためには、以下のいずれかのレベルをホストにインストールする必要があります。

プログラム番号	製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
5694-A01	z/OS v 1.11	APAR OA26997 - 適用可能なすべての PTF
5694-A01	z/OS v 1.10	APAR OA26997 - 適用可能なすべての PTF
5694-A01	z/OS v 1.9	APAR OA26997 - 適用可能なすべての PTF APAR OA27379 - 適用可能なすべての PTF



---

## 第 18 章 AIX、Linux、および Linux on System z

---

### 制限: Linux on System z 上で Installation Manager を実行する場合は、ルート・ユーザーとして Installation Manager を実行します

Linux on System z SuSE 上の Installation Manager は、root ユーザーがプログラムを実行していない場合は、正しく動作しません。

---

### 制限: z/OS UNIX サブシステム用および Linux on System z システム用のリモート・シェルは、全機能を備えたシェルではなく、すべてのシェル・コマンドが期待どおりに動作するとは限りません。

リモート・シェルはすべてのシェル・コマンドをサポートするわけではありません。これは、すべての AIX (UNIX 接続タイプ)、Intel Linux、および zLinux 接続に当てはまります。

Rational Developer for zEnterprise には、リモート・シェルと Ssh ターミナルの両方があります。Ssh ターミナルには、Rational Developer for System z に存在する制限がありません。

コマンドの戻りコードを表示するには、次のようにコマンドを発行します。  
(command; echo \$)

---

### 制限: 一部の Rational Developer for System z フィーチャーは、Linux 環境でサポートされていません

問題: 以下の Rational Developer for System z フィーチャーが Linux 環境でサポートされていません。

- ローカルの COBOL および PL/I ネイティブ・コンパイラー
- ローカルの COBOL および PL/I デバッグ
- PL/I ローカル構文検査および「依存関係の表示」
- PL/I EST シナリオ
- File Manager
- Fault Analyzer
- BIDI 使用可能化
- CICS TX Series

---

### 制限: Rational Developer for System z を Linux 環境で使用している場合に、コンテンツ・アシストが Ctrl-space キーで動作しません

問題: Rational Developer for System z を Linux 環境で使用している場合に、コンテンツ・アシストが Ctrl-space キーで動作しません。

**回避策:** Developer for System z 設定で、コンテンツ・アシストのキー・バインディングを他のキー・ストローク・パターンに変更します。「**ウィンドウ (Windows)**」>「**設定**」>「**一般**」>「**キー**」に進み、コンテンツ・アシストのキー・バインディングを変更します。詳しくは、[http://wiki.eclipse.org/IRC\\_FAQ#Why\\_did\\_Content\\_Assist\\_stop\\_working.3F](http://wiki.eclipse.org/IRC_FAQ#Why_did_Content_Assist_stop_working.3F)を参照してください。

Developer for System z 内でコンテンツ・アシスト用のキー・バインディングを変更する代わりに、Developer for System z と競合しているツールのキー・バインディングを変更または除去することができます。そちらを変更すれば、コンテンツ・アシストを Ctrl-space にバインドしたままにできます。Ctrl-space キー・ストロークを妨害している可能性のあるツールの例には、以下のようなものがあります。

- 英語以外のソフトウェアまたはキーボード
- スクリーン・リーダーなどのアクセシビリティ・ソフトウェア
- キー・バインディングを使用したバックグラウンド・プロセス

---

## 制限: 「新規ローカル/リモート・アクション」ボタンが使用できません

このトピックでは、「設定」の「メニュー・マネージャー」セクション内の「新規ローカル/リモート・アクション」ボタンが使用不可になっている状態の回避策について説明します。

### オペレーティング・システム:

- Red Hat Enterprise Linux V5 および V6 の 32 ビットおよび 64 ビット
- SUSE Enterprise Linux V10 および V11 の 32 ビットおよび 64 ビット

**問題:** 「新規ローカル/リモート・アクション」ボタンが使用不可であるため、新規のローカル・アクションまたはリモート・アクションを作成できない。このボタンは「設定」ウィンドウの「メニュー・マネージャー」>「アクションおよびメニュー」ページの「アクション」タブにあります。

**分析:** 通常のユーザーには、TPF 情報ディレクトリー TPFSHARE への書き込み権限がありません。このディレクトリーの絶対パスの例は、/opt/ibm/SDPShared/Config/TPFSHARE などです。このディレクトリーは、「ファイル選択」リストに表示されているアクション・ファイルのデフォルト・ディレクトリーです。

### 解決法:

この問題を解決するには、次のようにします。

1. 次のようにして、ユーザーが書き込み権限を持つディレクトリーに新しいアクション・ファイルを作成します。
  - a. 「アクションおよびメニュー」ページの「ファイル選択」グループで、「新規」をクリックします。
  - b. 「新規ファイル」ウィザードで、次のようにします。
    - 1) 新規アクション・ファイルのディレクトリーと名前を指定します。ディレクトリーは、ユーザーが書き込み権限を持つものである必要があります。
    - 2) 「完了」をクリックします。



これで、「新規ローカル/リモート・アクション」ボタンが使用可能になったはずです。

2. 新規アクション・ファイルへのアクションの追加が完了したら、そのアクション・ファイルを、スーパーユーザー特権を持つ他のユーザーに依頼して、TPFSHARE ディレクトリーにコピーしてもらいます。

注: この問題を解決する他の方法には、以下のものがあります。

- Rational Developer for System z を起動する前に、スーパーユーザーとしてログオンします。
- 通常のユーザーに、TPFSHARE ディレクトリーへの書き込み特権を付与します。



---

## 第 19 章 エンタープライズ・サービス・ツール

---

### 単一サービス・プロジェクト

#### 制限: ミート・イン・ミドルのマッピング・ファイルの表示が空白になります

問題: Linux において、ミート・イン・ミドルの開発シナリオでは、エディター内の Response.mapping ファイルの表示が、「マッピングの作成」ウィザードの終了時に空白になります。これは、Windows 上でも発生することがあります。

回避策: マッピング・ファイルを再度開くと、マッピング・エディターにマッピング・ファイルの内容が表示されます。

#### 制限: トップダウン・シナリオ以外では、PL/I コンパイル済み XML 変換が、XML 属性のマッピングまたは生成をサポートしません

問題: エンタープライズ・サービス・ツール PL/I コンパイル済み XML 変換は、ミート・イン・ミドルのシナリオで既存の XSD から PL/I データ項目への属性のマッピングをサポートせず、ボトムアップ・シナリオで属性を生成しません。

回避策: ありません。この条件は PL/I コンパイル済み XML 変換の制限です。

#### 制限: 01 レベルのスカラー・エレメントがサポートされていません

Web サービスとして PL/I アプリケーションを使用可能にするエンタープライズ・サービス・ツールの単一サービス・プロジェクトでは、01 レベルのスカラー・エレメント (例: DCL 01 CHARARRAY char(255);) がサポートされていません。構成済みタイプ のみがサポートされています。

#### 制限: PL/I コンパイル済み XML 変換が、オプションの「調整あり」または「調整なし」属性に従いません

問題: エンタープライズ・サービス・ツールの PL/I コンパイル済み XML 変換が、PL/I 言語構造または言語構造メンバーに関するオプションの「調整あり」または「調整なし」属性に従わない。

回避策: ありません。この条件は PL/I コンパイル済み XML 変換の制限です。

#### 制限: 古い WSDL/XSD ファイルおよび新規 WSDL/XSD ファイルでのボトムアップ競合

問題: ボトムアップ開発シナリオでは、生成された古いバージョンの WSDL ファイルと XSD ファイルを、新しく生成されたコンバーターで使用すると、実行時にエ

ラーの原因となる可能性がある。例えば、出される可能性のあるランタイム・エラー・メッセージとして、以下のものがあります。

IGZ0282S プログラム「PGMNAME」で XML からデータ構造への変換を完了できませんでした。これは、XML 文書のエレメント名がコンバーターによって認識されなかったためです。

**解決策:** コンバーターで生成された WSDL/XSD は、必ず各コンバーターと結合されている必要があります。

## 制限: z/OS のみで稼働する単一サービス・ウィザードによって生成される COBOL 変換ルーチン

ワークステーション COBOL コンパイラーは、コンパイル時と実行時の両方で XML PARSE ステートメントをサポートしますが、単一サービス・ウィザードで生成される COBOL プログラムは、z/OS 環境でのみ稼働するように設計されています。

## 制限: スキーマをインクルード、インポート、または再定義するリモート (z/OS UNIX) WSDL ファイルのインポートを伴うトップダウン/ミート・イン・ミドル・シナリオはサポートされません

**問題:** エンタープライズ・サービス・ツール・プロジェクトで、スキーマをインクルード、インポート、または再定義する WSDL ファイル (元はリモート・ロケーションからインポートされたもの) を対象に、「新規サービス実装の作成 (トップダウン)」シナリオ、または「既存サービス・インターフェースのマップ (ミート・イン・ミドル)」シナリオを実行すると、エラーで失敗する。

**回避策:** 必要なすべてのファイルをワークステーション、またはワークスペース内の一般プロジェクトへコピーし、「RMB」>「インポート」>「ソース・ファイル」を使用して、ローカルの WSDL ファイルを「Web Services for CICS プロジェクト」へインポートした後、トップダウン・シナリオを試行します。

## 制限: XML エLEMENTのネストの深さ

**問題:** XML to 言語構造コンバーターが次の例外メッセージを戻す。

IGZ0291S プログラム program-name で XML からデータ構造への変換を完了できませんでした。これは、XML エLEMENTのネストの最大深さを超えたためです。  
文字コンテンツ character-content が含まれているELEMENT element-name でエラーが発生しました。  
(IGZ0291S XML to data structure conversion could not complete in program program-name because the maximum XML element nesting depth was exceeded. The error occurred at element element-name with character content character-content.)

**回避策:** XML to 言語構造コンバーターは、特定の XML ELEMENTのネストの深さを処理できませんでした。ネスト・レベルにはオリジナル COBOL 構造を上回る許容度がありますが、その許容度を超えることがあります。スキーマにないELEMENTが要求 XML 文書に存在する場合、そのELEMENTのネスト・レベルが深すぎると、このような状態が生じます。

## 制限: OPT コンパイラー・オプションの競合

**問題:** ドライバー・プログラムやコンバーター・プログラムで生成された PROCESS ステートメントの OPT コンパイラー・オプションが JCL のコンパイル・オプションに指定されていると、TEST オプションと競合する。

**回避策:** 生成された XML コンバーター・プログラムをデバッグしたい場合は、Web サービス・ウィザードの「生成オプション」ページで「コンパイラー関連設定の指定」グループ内の「最適化」チェック・ボックスを選択解除します。

## 制限: 「XML 使用可能化」ウィザードの特定のテキスト入力フィールドにおける大/小文字の区別

**問題:** Windows 上の Eclipse でフォルダー名およびファイル名を入力するときに大/小文字が区別される。

**回避策:** フォルダー名およびファイル名を矛盾がないように入力してください。例えば、ワークベンチでフォルダー名が MyFolder と表示されている場合、フォルダー名を必要とする入力フィールドには必ず MyFolder と入力してください。例えば myfolder と入力すると、ツールはこの入力に対して無効または存在しないフォルダー名としてフラグを立てます。

## 制限: 無効なポインターによる無限ループ

**問題:** XML コンバーターまたはドライバーへのポインターとして非ヌルの無効なポインターが指定されると、無限ループが発生する。

**回避策:** XML コンバーターは、呼び出し元により渡されたヌル・ポインターを検出し、報告しようとしています。非ヌルの無効なポインターの場合、XML コンバーターはたぶんこれに出会うと、保護例外 (SOC4) を戻します。

## 制限: COBOL データ構造内の FILLER 項目

**問題:** 名前のないグループおよびその基本項目は、親項目が基本項目と一緒にフィルタリングされてしまうため、データ構造選択ページまたはマッピング・セッション・エディターでの選択に使用できない。

**回避策:** COBOL データ構造を編集して、変換の必要なグループおよび/または基本データ項目に名前を付けてください。COBOL グループに名前を付けると、FILLER 以外の基本項目が選択可能になります。

## 制限: 「生成」>「XML ファイル」メニュー項目が XSD スキーマの制限を順守しません

**問題:** 「生成」->「XML ファイル」メニュー項目が XSD スキーマの制限を順守しない。エンタープライズ・サービス・ツールで作成された XSD に対して XML ファイル生成 (Generate XML File) アクションを使用すると、無効な XML ファイルの生成につながる可能性があります。

**回避策:** 生成された XML ファイルを編集し、タグの内容が XSD スキーマで指定されている制限に準拠するようにします。

## 制限: XML および Web サービスのバッチ・プロセッサ: 構成 XML に無効な項目があると、バッチ・プロセスの実行中に NULL ポインター例外が発生することがあります

問題: オプションの XML ファイル

(Container.xml、PlatformProperties.xml、ServicesSpecification.xml) に無効な項目があると、バッチ・プロセッサの実行中に NULL ポインター例外が発生することがある。

回避策: オプションの XML ファイルの項目を正しい形式に修正します。

## 制限: 表意定数 LOW-VALUES および HIGH-VALUES に関する制限

表意定数 LOW-VALUE(S) および HIGH-VALUE(S) を、単一サービス・ウィザードで使用される COBOL データ構造内に指定することができる。ただし、これら表意定数のセマンティックの意味は、単一サービス・ウィザードでは無視され、これらの「エンタープライズ・サービス・ツール」単一サービス・ウィザードが生成する成果物には反映されない。

## 制限: 「生成」>「XML ファイル」メニュー項目が XSD スキーマの制限を順守しません

問題: 「生成」->「XML ファイル」メニュー項目が XSD スキーマの制限を順守しない。エンタープライズ・サービス・ツールで作成された XSD に対して XML ファイル生成 (Generate XML File) アクションを使用すると、無効な XML ファイルの生成につながる可能性があります。

回避策: 生成された XML ファイルを編集し、タグの内容が XSD スキーマで指定されている制限に準拠するようにします。

## 制限: 一時ファイルが必ずしもクリーンアップされません

問題: 「エンタープライズ・サービス・ツール」単一サービス・ウィザードを実行した後、一時ファイル (例えば、~DF45B.tmp) がエンタープライズ・サービス・ツールの単一サービス・プロジェクト・フォルダーに残ることがある。

回避策: 「エンタープライズ・サービス・ツール」単一サービス・ウィザードの実行後に、同じような名前のファイルがエンタープライズ・サービス・ツールの単一サービス・プロジェクトにある場合、そうしたファイルは削除してかまいません。

## 制限: 一時プロジェクトが必ずしもクリーンアップされません

問題: 古いマッピング・ファイルのマイグレーション・プロセスの場合、参照されたマッピングされる側のソース・ファイルはマッピングする側のファイルと同じフォルダーになければならない。この要件が満たされないと、マッピング・マイグレーション・ツールは「Resource [filename].mapping is not local」というエラー・メッセージを出して失敗します。

**回避策:** 「エンタープライズ・サービス・ツール」 単一サービス・ウィザードの実行後に、同じような名前のプロジェクトがワークスペースにある場合、これらのプロジェクトは削除してかまいません。

## **制限: バージョン 6.0 マッピング・ファイル (.cmx ファイル) をマイグレーションするとき、.cmx ファイルで参照されるソース・ファイルが同じフォルダー内になければなりません**

**問題:** 古いマッピング・ファイルのマイグレーション・プロセスの場合、参照されたマッピングされる側のソース・ファイルはマッピングする側のファイルと同じフォルダーになければならない。この要件が満たされないと、マッピング・マイグレーション・ツールは「Resource [filename].mapping is not local」というエラー・メッセージを出して失敗します。

**回避策:** 参照されたソース・ファイルを、マイグレーション対象のマッピング・ファイルと同じフォルダーに移動します。

## **制限: SOAP for CICS および Web Services for CICS での DBCS データ・メンバーのサポート**

エンタープライズ・サービス・ツールの単一サービス・プロジェクトで DBCS データ項目をサポートするには、要求 XML 文書と応答 XML 文書を UTF-16 または UTF-8 でエンコードする必要があります。Web サービスのターゲット・ランタイムが SOAP for CICS の場合、UTF-8 または UTF-16 の XML を XML コンバーター・ドライバーと交換するためのフィーチャーを構成します。Web Services for CICS ランタイムは、デフォルトとして UTF-8 の XML をクライアントと交換しますが、XML コンバーター・ドライバーは、CICS と XML を UTF-16 で交換します。UNICODE が必要な場合は、XML コンバーターには現時点で UTF-16 が最も有効が選択です。いずれのランタイムの場合も、UNICODE と DBCS ホスト・コード・ページ間の変換をサポートする変換イメージを使用して、UNICODE のための z/OS サポートを構成する必要があります。

## **制限: 生成された XML コンバーター・ファイルの名前に DBCS 文字を使用できません**

**問題:** z/OS では、区分データ・セット・メンバーの名前に DBCS 文字を使用できない。

**回避策:** XML コンバーター・ファイルの名前を指定するときには、DBCS 文字を除外します。また、ウィザードから提示されたデフォルト・ファイル名に、DBCS 文字が含まれていないことを確認してください。

## **制限: 生成された XML スキーマのグローバル・エレメント名が、解釈 XML 変換タイプとコンパイル済み XML 変換タイプとの間で矛盾します**

**問題:** 解釈変換とコンパイル済み XML 変換のデフォルト世代により生成された XML スキーマ内の Web サービス・メッセージ・ルート・エレメント名が一致しない。コンパイル済み XML 変換の世代デフォルトを、解釈変換ケースに一致するよ



うに変更する必要があります。これについては、以下の「予備手段」セクションに説明があります。これによってユーザーは、後に必要であれば、WSDL ファイルをリパブリッシュすることなく、また Web サービスのクライアントにおいてコード変更を行うことなく、変換タイプを解釈変換からコンパイル済み変換へ変更することが可能となります。

**回避策:** コンパイル済み XML 変換の成果物を生成する場合、ウィザードを使用して、解釈 XML 変換に一致するようにルート・エレメント名を変更することができます。新規オプション「ルート・エレメント名」は、「要求および応答 XML スキーマ・プロパティ」グループの「WSDL および XSD オプション」タブの「生成オプション」ページにあります。

例えば、COBOL グループ (A-B-C) は、メッセージ・ルート・エレメント名が「a\_b\_c」という解釈変換成果物を生成します。デフォルトのコンパイル済み変換成果物のルート・エレメント名は「ABC」となります。先に述べたように、ウィザードで「ABC」を「a\_b\_c」に変更して、解釈変換用に生成した WSDL に一致させることができます。

## **制限: Enterprise COBOL で、OPTIMIZE (OPT) オプションを使用して COBOL XML コンバーターをコンパイルしたときに、メッセージ IGYOP3094 が発行されます**

**問題:** Enterprise COBOL 最適化プログラムで、この COBOL 最適化プログラムを使用したときに、RD/z エンタープライズ・サービス・ツールのウィザードによって生成されたコンパイル済み XML 変換コード内のいくつかの PERFORM ステートメントにフラグが立つ。メッセージのフォーマット・メッセージは、以下のとおりです。「IGYOP3094-W 「PERFORM (行 n)」の「PERFORM」ステートメントからそれ自体へのループが存在する可能性があります。「PERFORM」ステートメントの最適化は試みられませんでした。(IGYOP3094-W There may be a loop from the "PERFORM" statement at "PERFORM (line n)" to itself. "PERFORM" statement optimization was not attempted.)」

**回避策:** XML2LS コンバーターの制御フローが複雑すぎて、COBOL 最適化プログラムを処理できません。COBOL 最適化プログラムによって使用されるアルゴリズムは、現時点では XML2LS コンバーター内でプログラム内の前のポイントに導く GO TO ステートメントが無条件でないことを認識できません。したがって、このケースでは、メッセージ IGYOP3094 は生成されたコードの正しさの問題でなく、最適化プログラムの制限を表しています。詳しくは、Enterprise COBOL APAR PQ74496 を参照してください。

---

## **サービス・フロー・プロジェクト**

### **制限: サービス・フロー・プロジェクトから生成された Web サービスが、それ自体を呼び出すこと (再帰呼び出し) できません**

サービス・フロー・プロジェクトから生成された Web サービスは、直接的にも間接的にも、それ自体を呼び出すことはできません。一般的には、サービス・フロ



ー・プロジェクト・ツールを使用すると、フローの再帰呼び出し、つまり直接的にまたは中間呼び出しを利用してそれ自体を呼び出すフローを作成することはできません。

ただし、サービス・フロー・プロジェクト・ツールは現在、次のタイプの再帰を検出しません。

- サービス・フロー・プロジェクトから Web サービス (例えば、WS01 など) を生成します。
- 生成された Web サービス (WS01) が他の Web サービス (例えば、WS02 など) を呼び出します。(なお、エンタープライズ・サービス・ツールでは、WS02 は「アウトバウンド Web サービス」と呼ばれます。呼び出し元の Web サービスの外部にあるからです。)
- 呼び出された Web サービス (WS02) が、元の Web サービス (WS01) を呼び出します。

この状態において: フロー・エディターは、再帰の作成時に再帰を検出せず、エラー・メッセージを表示しません。CICS サービス・フロー・ランタイムのランタイム・コードを正常に生成でき、Web サービス (WS01) をデプロイできます。Web サービス (WS01) の実行時に、2 番目の Web サービス (WS02) の呼び出しが成功します。ただし、再帰呼び出し (WS02 から元の WS01 に対する呼び出し) は失敗します。

## **制限: それ自体へ戻るようにワイヤリングされた接続についての制限**

**問題:** フロー・エディターが、フローの実行パスをそれ自体 (フローの実行パス内にある、それ以前のポイント) へ戻すようなワイヤリングの接続を追加できないようになっていない。この状態では、ランタイム・コードの生成時にエラーが発生しない可能性があります。ただし、ランタイム処理中にエラーが発生する可能性が非常に高くなります。

**回避策:** 特定の条件が真である間、フローの一部を複数回繰り返したい場合は、While ノードを使用します (エンタープライズ・サービス・ツールの資料で、ループの作成に関するトピックを参照してください)。

## **制限: パスまたはファイル名に英語以外の文字が含まれていると、COBOL コピーブック・ファイルのインポートが失敗します**

**問題:** COBOL コピーブック・ファイルをインポートしようとする場合、ファイル・パスまたはファイル名に英語以外の文字が含まれていると、インポートが失敗する。

**回避策:** PL/I インクルード・ファイルの名前を、英語のみの文字を含むように変更してください。パスに英語のみの文字が含まれるディレクトリーにファイルを配置してください。

## 制限: 競合するメッセージおよびフィールド名によりコンパイル・エラーが発生します

**問題:** あるフローを作り、1 つのメッセージのフィールドの名前が別のメッセージの名前と同じ場合、生成された COBOL コードは、名前の競合が原因で、IGYPS0037 エラーを発して、コンパイルできない。例えば、そのフローが (1)「Y」というフィールドを伴う「X」というメッセージと (2)「Y」というメッセージを参照している場合、生成されたコードが項目「Y」を参照すると、COBOL コンパイラーは、その参照先がメッセージ「Y」であるか、フィールド「X の Y」であるか分かりません。

**回避策:** 名前の競合を解決するために、メッセージまたはフィールドのいずれかをリファクタリングしてください。EST Project Explorer において、重複名を持つ項目の 1 つを選択します。コンテキスト・メニューを開き、「名前変更 (Rename)」を選択してください。

## 制限: usage 文節が POINTER のインポート済みソース・コードに関する制限事項

**問題:** 使用タイプが POINTER のフィールドを含む、COBOL または PL/I ソース・コードのデータ構造をインポートすると、対応するフィールドがタイプ hexBinary でメッセージが作成される。このため、「ランタイム・コードの生成」ウィザードが失敗します。

**回避策:** メッセージ・エディターでメッセージを編集します。エディターの「拡張」タブで、フィールドのタイプを HexBinary から int へ変更します。このように変えると、生成が正常に完了できるようになります。

## 制限: 画面メッセージが簡単に置き換わりません

**問題:** 誤って画面メッセージ・ファイルを削除し、画面を再インポートまたは再キャプチャーして置き換えようとした場合、それらのファイル内のメッセージへの参照が壊れたままになる場合があります。これは、画面メッセージごとに、固有 ID が生成されて、その固有 ID を使用してその他のファイルの画面メッセージを識別するためです。

**回避策:** プロジェクトを頻繁にバックアップしておきます。画面メッセージ・ファイルを誤って削除したときに、フローの再モデル化を望まない場合は、画面の再インポートまたは再キャプチャーではなく、バックアップ・バージョンのファイルをインポートすることによって画面メッセージを元に戻します。

## 制限: COBOL プログラムを「チャンネルでの LINK」ノードとして使用するためにインポートし、操作エディターで操作を開くと、生成プロパティーを変更できません

**問題:** COBOL プログラムを「チャンネルでの LINK」ノードとして使用するためにインポートした後、操作エディターで操作を開くと、生成プロパティーを変更して Service Flow ランタイムを選択できず、レベル 1.0 が選択項目としてリストされない。

**回避策:** プログラム・タイプを commarea または MQ に変更して「OK」を押し、変更を保存してから生成プロパティ・エディターを再オープンします。そうすると、ランタイム・レベル 1.0 の選択項目が使用可能になります。



---

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502  
神奈川県大和市下鶴間1623番14号  
日本アイ・ビー・エム株式会社  
法務・知的財産  
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*IBM Corporation*  
*Intellectual Property Dept. for Rational Software*  
*IBM Corporation*  
*5 Technology Park Drive*  
*Westford, MA 01886*  
*U.S.A.*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

#### 著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは、現存するままの状態を提供され、いかなる保証条件も適用されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. \_年を入れる\_.

---

## プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース: プログラムを作成するユーザーが Rational Developer for System z のサービスを使用するためのプログラミング・インターフェースがあります。これは、Developer for System z を使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様は Rational Developer for System z ツールのサービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

---

## 商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

IT Infrastructure Library は英国 Office of Government Commerce の一部である the Central Computer and Telecommunications Agency の登録商標です。

Intel、Intel (ロゴ)、Intel Inside、Intel Inside (ロゴ)、Intel Centrino、Intel Centrino (ロゴ)、Celeron、Intel Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

ITIL は英国 Office of Government Commerce の登録商標および共同体登録商標であって、米国特許商標庁にて登録されています。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Java およびすべてのJava 関連の商標およびロゴは Oracleやその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Cell Broadband Engine、Cell/B.E は、米国およびその他の国における Sony Computer Entertainment, Inc. の商標であり、同社の許諾を受けて使用しています。

他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。







Printed in Japan

GI88-4275-00



日本アイ・ビー・エム株式会社

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21